

地 誌 教 育

—とくに中等教育における世界地誌の取り扱いについて—

小 倉 幸 春

はじめに

地理学の体系は、一般地理学と地理学特論（地誌）とに二大別できる。一般地理学は、系統地理学あるいは地理通論ともよばれ、いくつかの専門分野に分かれ、各分野における発達はいちじらしい。それに対して、地誌学は、一般に地誌とって学の語をあえてつけないことに示されるように、学問的というよりも応用的、実用的な地理といった感じがつよい。

一般に教科の教育は、内容面での背景となっている学問と密接不離な関係がある。地理教育もその例外ではなく、地理学の研究成果や方法と深く結びついている。地理学の研究領域はしだいに拡大し、また研究者の世界観や社会観の相違によってその学問的性格にも種々変化がみられるようになってきた。地理教育もそれらの影響を受けてきた。

これから、世界地誌を主要な学習内容とする現行の高校地理 B が、地理教育史上どのような位置にあり、また地理教育の中で世界地誌がどのように取り扱われてきたかを考察し、あわせて中等教育における世界地誌教育のあり方を探求してみたい。

地理教育史における地誌教育

わが国の地理教育の推移の概要を回顧することにより、現行の高校地理 B のもつ位置と意義を理解することに役立たせたい。

明治時代以前の地理テキスト^(註1)教育の普及がきわめて限定され、教育内容の種類や程度も限られた時代であって、地理もすでに教育テキストとして姿をあらわしていた。

一 江戸時代以前 江戸時代以前の地理テキストはきわめて単純で、日本国中の国名を列挙した「日本国尽」と京都の町名をたんねんに拾い上げた「京町尽」との2種類にほとんど限られていた。学習目的が、和歌・日記・故実などを学ぶ上の準備教養であったからであろう。

何れにしてもまだ、地理学習の独立した動機と自覚のもとに学ばれたものではなかった。

二 江戸時代の往来物 近世に入って政治・経済・文化の全国的交流がみられるようになり、城下町や純然とした経済都市が発達するに及んで、往来物という地理テキストが単行本として独立に編纂され、さらに郷土化した各地方それぞれの特殊テキストが現われるようになった。これらの往来物は、編纂の目的ならびに方式の上から次のように分類されている。

1. 国尽型 日本国尽を古しえとしてその流れを汲む1群の地理的往来物を国尽型とする。すなわち、大は世界万国の国名尽から、小は1町1村の字名尽に至るまで、いやしくも一定の地域団体に属する地名・町名をたんねんに列挙していくことを主義とする編纂体裁をとる。広く全国の寺小屋で用いられたものもある。3百種以上が知られている。
2. 地誌型 特定の国なり都市なり郷村なりの、地勢・風土・気候・産物・人情風俗・領主・名所旧蹟・神社仏閣などを記述したものである。今日の地誌の概念に相当する。万国地理

に関するものも明治初期に出現した。各種合計3百以上が残っている。

3. 都路型 東海道を江戸から京都へ上る道筋の駅名を詠み込んだ韻文からできている『都路往来』を先駆とし、都市と都市を結びつける交通路を示すために、宿駅の名をじゅんに詠み込んでいく往来物をいい、別に旅行の心得など万端について記したものもあり、80種ほどがつつぎに編纂された。
4. 参詣型 神社仏閣とか名所旧蹟とかへ参ずる道の道しるべを主眼としたもので、信仰と趣味を中心にしたものであるから美文で書かれ、これまた3百種近い数に達する。
5. 特殊型 ある特定の観点に立って地理的叙述を試みたもので、例えば名山を中心観念とする『諸国名山往来』、名物名産を叙した『日本諸国名物往来』などが好例である。これも約60種知られている。

江戸時代初期から明治時代初期にかけて編纂された地理科往来物の種別は合計1千種を越える豊富さであり、相当に郷土化していたことも察知できる。なお、江戸時代までの地理が主として人文現象としてのものであり、自然地理が等閑視されていたといえよう。

明治初年から明治30年頃まで^(註2)地理がわが国において学校教育の中に独立した学科として取り入れられたのは明治以後のことである。

- 一 地理科の登場 明治2年に小学規則が設けられ、小学校の課程は句読・習字・算術・語学・地理学・五科大等と定められた。明治5年の学制により近代的学校制度が始められ、その附法小学教則によれば地理読方・地理学論講が課せられることになった。これらの地理的科目においては、読方教授とならば本質的に異なるところがなく、いまだ厳密な意味で地理教授は行われていなかった。

中学校の制度は明治5年の学制において初めてその規定が設けられたが、当時適当な教科書がなかったため、原書や外国書の翻訳書を使用した。したがって欧米を中心とした地理がそのまま教授されて、わが国をとくに顧慮した教材は与えられなかった。

- 二 地理教育の発展 明治12年の教育令では地学読方・地理論講は地理という独立の科目に変わり、明治14年の小学校教則綱領において「第十四条地理 地理ハ中等科ニ至テ之ヲ課シ先学校近傍ノ地形即生徒ノ親シク目撃シ得ル所ノ山谷河海等ヨリ説キ起シ漸ク地球ノ有様ヲ想像セシメ次ニ日本及世界地理ノ総論、五畿八道ノ地理、外国地理ノ大要ヲ授ケ高等科ニ至リテハ地文ノ大要即地球、地皮、大気、水陸、生物、物産等ノ事ヲ授クヘシ凡地理ヲ授クルニハ地球儀及地図等ヲ備ヘンコトヲ要ス殊ニ地文ヲ授クルニハ務テ実地ニ就キ児童ノ観察力ヲ養成スヘシ」と示されている。これはペスタロッチ流の教授法に基づくものであるが、これによって地理教育が初めて方法的な基礎を与えられた。これとともに自然地理的方面がしだいに重視され、地理的要素が有機的連関を附して説明される傾向を生んだ。地図がさかんに利用され始めたのもこの時期である。ここに至って地理科はようやく文字の暗記から転じて、事実を得る学科として独自の価値を認められるようになった。

なお、この教育令期には前の学期期に対比して、中学校教育が整備されてきた。しかしこの時期の中学校において、どのような内容の地理教育が行われたか定かではないが、事実の羅列を主とし、地理知識の注入に主眼があり、一世を風靡する開発主義的教授法はなんらの影響を与えていなかったらしい。

明治19年公布の小学校令は、修業年限4か年の尋常小学校を義務教育とし、その上に4年制の高等小学校を置き、小学校の学科およびその程度を文部省令によって定めることとした。

それによれば、地理は高等小学校においてはじめて履修すると定め、「地理ハ学校近傍ノ地形其郷土郡区府県本邦地理地球ノ形状昼夜四季ノ原由大洋大洲ノ名目等及外国地理ノ概略」を内容とするとされた。明治23年の新小学校令によれば、義務教育の尋常小学校の修業年限が3か年または4か年となり、地理は教科目上では日本地理と外国地理にわけられ、高等小学校において日本地理が必修であるが、尋常小学校における日本地理と高等小学校における外国地理は選択とされ、「日本地理及外国地理ハ日本ノ地理及外国地理ノ大要ヲ授ケテ人民ノ生活ニ関スル重要ナル事項ヲ理會セシメ兼テ愛國ノ精神ヲ養フヲ以テ要旨トス」と規定した。しかし新小学校令にもとづいて提示された小学校教則大綱の規定や明治20年代に刊行された地理教科書によれば、当時の新思潮の陶冶主義の他教科目とは異なり、地理教育の場合には開発主義の影響が色濃く残り、しかも正統的な教授法としてつよく意識されていた。

明治19年に中学校令も定められ、省令によれば尋常中学校においては地理の程度は「地文及政治地理」とあるに過ぎない。明治27年改正省令説明では「蓋地文ノ教授ハ理科的性質ニ属スト雖政治地理ハ実ニ歴史ト密着ノ關係ヲ有シ殊ニ近世ノ歴史ニ至テハ地理ノ変化ト互ニ相顧應スルヲ要ス彼ノ徒ニ面積人口ノ記憶ニ偏スルカ如キハ地理教授ノ本旨ニアラス現ニ行フ所ノ地理ノ描図ノ如キモ固ヨリ必要ナラストセスト雖其ノ程度ハ過高ニ誤ラス簡單ナル輪廓、形状ヲ描カシムルヲ以テ足レリトスヘシ」という方針が述べられている。ともあれ政治地理と題しながら明治20年代においては地誌そのものと解されていた。また自然地理と地文学とは、同義語とされた。なお授業時数は、歴史と組んで割当てられ、歴史と地理とあわせて1学年から4学年までがおのおの週3時間、5学年は週4時間とされていた。

また、明治19年に教科書検定制度が発足し、小中学校における教科書はしだいに文部省検定済のものになっていった。

わが国の明治期における地理書を見ると、日本地理において明治20・30年代に労作といえるものが刊行されるようになるが、世界地理に関する著述で後世に名を残すものは見あたらない。明治中期までの世界地理書は、語学に秀れた人物がいわゆる原書の幾冊かを読んでこれらを種本にし、後はデスクワークでまとめあげたと考えられている。^(註4) 最高水準でさえこのようであるから、地理教育の最前線においてはある程度の低迷は当然であったろう。

明治30年代から第2次大戦時まで^(註5) わが国における近代化は、しだいに各方面に浸透していき、20世紀に入ると多方面においてそれぞれ新しい様相を展開させるのであった。

一 地理教育の統一 明治政府がわが国の近代化に努力したので、教育法規も中央集権的に整備され、さらに国粋主義の台頭の影響を受け、地理教授の目的が国家観念養成の立場から統一され始めた。

明治33年の小学校令の改正により、高等小学校1・2学年に日本地理、3・4学年に外国地理が課せられることになり、新しい教則が示された。新旧教則を比較すると、わが国の国勢の大要を理解させ、政治・経済上の状態を知らせてわが国の外国に対する地位を知らせ、交通に関する事項を取り扱うことなどが新しく添加された。さらに旧教則で「尋常小学校ノ教科ニ日本地理ヲ加フルトキハ郷土ノ地形方位ヨリ授ク」とあったが、これが一般に誤解されて全然地方誌としてすこぶる詳細な地理的事項を取り扱ったので、新教則はその誤解を解くためにその事項を削除した。

教授法もベスタロッチの開発主義から注入主義の傾向をもつヘルバルト派の段階教授に漸次移行した。とくに、昭和36年に小学校の教科書が国定化されることとなり、同年国定教科

書『小学地理』が出現した後、地理教授の内要・方法が全国的に画一化することになった。この小学地理について特記すべきことは、地理的要素の各方面を網羅し、連関的説明をとるに至ったこと、外国地理が日本との関係を重視したこと、外国地理を授けた後に再び日本地理を補習してわが国の位置を明かにしたことなどである。また日本地理は府県誌が主でそれに簡単な地方総論が附加されてあった。なお、明治40年の義務教育2年延長により尋常5・6学年に地理を課すことになり、尋常6学年に「滿州及外国地理ノ大要」を授け、高等1学年に外国地理、同2学年に地理補習を課すことになった。教科書も全面改訂され、『尋常小学地理』、『高等小学地理』と名称も変更された。『小学地理附図』が初めて明治41年から使用させたが尋常小学校用と高等小学校用の2種あった。

中等教育は、明治32年中学校令改正、高等女学校令公布によってさらに整備され、明治35年に中学校教授要目が定められた。これによれば地理は、1学年毎週2時間緒論・日本地理・外国地理、2・3・4学年おのおの週1時間外国地理、5学年週1時間地文とされ、それまでに例をみないほど詳細な内容で学年ごとに教授内容を指定した。この要目は明治44年に改正されてその効力を失うが、この10年足らずの間に中学校用地理教科書の定式が確立し、第2次世界大戦末期に中学校用国定地理教科書が刊行されるまで使用された検定教科書の母型が生まれた。さらに、この教授要目について「教授上の注意」をみると、単純な知識の詰め込みが意図されたのではなく、その基本的な心構えについては今日でもほとんど変わらないといえるのではないか。

二 地理学の進歩と地理教育 往来物的地誌知識と翻訳的外国事情の雑然たる集大成にすぎなかったわが国の地理の分野にも、近代地理学が導入され、地理科が在来の古い型を脱して新しい学問的体系を整えてきた。明治44年改正の中学校教授要目をみると、最後の5学年履修の自然地理概説・人文地理概説はその内容排列がすこぶる科学的になり、改正前のものではただ地文だけだったのに、今や人文地理を加えられるに至ったのである。

しかして、大正年間に入るとともに、地理は記憶すべきものではなく、推究すべきものであるということが叫ばれ、大正7・8年に改訂された国定教科書『尋常小学地理書』は、大正8年から地理の授業時数が週2時間に増えることに対応するとともに、この新しい機運がある程度まで反映するものであった。すなわち、日本地誌の記述における地域区分は、従来の府県別方式を廃して、総合した地理の教授ができるように各地方別に地勢・産業・交通・都邑の題名でその地方全般をまとめて理解できるように、新しい形式をとった。この地方別地誌の採用はその影響を世界地誌にも及ぼし、国別地誌から州別地誌への転換が試みられた。この時代の、新教育の運動もあり、生徒の興味や理解を重くみる教授思潮から、挿絵と図を大幅に増やし、名所・旧蹟・市街や風景などの挿絵を少なくし、新たに多くの図を掲げた。すなわち、当時の新資料によって地理的事項を添加している外に、大局に着眼して地理事項の軽重要否を考察させ、かつ自然事項と人文事項との連絡に留意し、挿絵・地図等を豊富にして努めて具体的説明をなし、児童に適当に地理上の概念を習得させようとした。

尋常小学地理書はその後、最後に世界と日本というまとめの節を設けた昭和10・11年の改訂、やつき早やの昭和13・14年の改訂が行われたが、それは新しい事態の変動に即応するため、すなわち、一つにはわが国の産業構造や経済地域の変動がいちじるしかったこと、他の一つには戦時体制への編成替えが急速に行われたためであった。教授上の基本的なものは、その書名と同様に大正期のものの継承であったといえよう。

大正時代から昭和初期までの中等教育において、科学としての地理学の影響下に、地理教育の目標は、地人相関の把握、あるいは地域性の意識であるとされた。前者の、地人相関論の地理教育への導入の主張は、年代がさがるにしたがって多くの人たちによってきかんになされるようになって、ついに昭和6年全文改正の中学校教授要目に「地理ニ於テハ自然及人類生活ノ情態ヲ理會セシメ兩者ノ相互關係ヲ明ニシ特ニ人類ガ自然ヲ利用開發シテ世界各地ノ文化ヲ形成セル所以ヲ知ラシメ」「殊ニ兩者ノ關係ヲ明ニシ我が国及外国ノ國勢ヲ知ラシメ國民タルノ自覺ヲ促スニ資スル」ことが期待されることになった。また、後者の、地理区教授論は、土地の単元を政治区画ではなく、地理的区画によって定めるべきであり、地理教授は地理的単元によって被教育者に地理的知能を得させることをめざすべきであると主張した。日本の地理区については田中啓爾の研究が最初のもので、その著『中等日本地理』（昭和3年）はこの地理区によって起草された教科書であった。

三 戦時の地理教育 昭和16年に国民学校が発足し、地理は修身・国語・国史とともに国民科の科目となり、昭和18年に『初等科地理』上下がおおやけにされた。これは、日本地誌を学習した後は外地や東亜諸国を取扱うだけの、大東亜政策に基づく政策的教科書であり、特別な戦時教科書であった。しかし、反面、それまでの地理教育の科学化の成果の大きな結実であったことも見逃せない。4学年で「郷土の観察」が週1時間、国史と地理の基礎を扱うため置かれた後をうけて、この教科書は今まで類例のない教材提出の方式をとった。日本地誌を展開するに当たり、8地方区分を放棄して、等質地域を根底にした新しい地域区分を採用した。また、記述方式を旅行記風な生活地理をその内容とし、文体もです・ます調に改め、さらに本文の各処に「しらべてみなさい」・「ひらいてみましょう」というような、児童の自主的学習を促がす配慮もありこまれていた。

さて、国民学校における地誌教育が新しい境地を開いたことに対応して、中等学校の地理教育にも大きな変化があらわれた。昭和18年の中学校教授及修練指導要目によれば、1学年で欧亜米各地域の特性をまず学び、2学年で日本・東亜が扱われた後、3・4年には日本と大東亜を主体にした国土国勢を学習するので、国民学校と中等学校との一貫教育が考慮されたといえる。教授上の注意として「図表・模型・写真及映画等ノ教具ヲ活用スルト共ニ描図其ノ他ノ図の作業ニ訴ヘ授業ヲシテカメテ具体的ナラシムベシ」「修学旅行其ノ他ノ適切ナル機会ヲ利用シテ現地指導ヲ為スベシ」と述べて、暗記中心主義からの脱却をうながしている点が注目される。戦争遂行中のきびしい情勢を回顧すると、これらの文章のそらぞらしさを感じずが、神がかり思想とは反対の極に位置する科学的な地理教育も同時に指向されていたという事実を指摘しておきたい。

以上のごとく、わが国の初等、中等教育における地理教育は、出発以来敗戦までは地誌教育を中心としてきた。各時期にそれぞれの綾はあっても、地誌教育が本流を占めたのであった。
(註6)
戦後 敗戦を契機に、わが国の教育は急転回した。アメリカ合衆国の強い影響を受けて、教育目標から教授内容、学習指導法まで一新させられ、学校制度も六三三四制に大変革された。戦前は地理科が独立の教科として存在していたが、戦後は社会科のなかに地理が包括された。

一 社会科の登場 昭和20年9月修身・歴史・地理などの教科書の内容のうち戦時色や軍国主義的とみられる部分を墨で抹消することを命ぜられ、同年12月修身・歴史・地理教育の停止が指令され、これらの教科書を回収された。これらの学科に代わって新しい教科である社会科が誕生することになり、小・中学校の社会科は昭和22年9月から、高等学校社会科は翌23

年4月から授業が開始された。

小学校社会科は、週当たり授業時数が1・2学年4， 3・4学年5， 5・6学年5～6と割当てられ、各学年において生活単元的な作業単元を4つほどずつ作るようになっており、それらの内容の構成には、一つは児童の生活経験領域の拡大に応じて、家庭・学校・郷土・日本・世界というような学習対象地域が拡大されていることで、他の一つは、戦前のような日本地理や日本歴史通史が姿を消し、社会機能を中心に内容を構成したことである。

中学校社会科は、1学年週5時間、2・3学年4時間、別枠に国史が2学年1時間、2学年2時間が割当てられていた。一般社会の内容構成も社会機能を中心にしたもので、学習指導要領は、各学年6単元ずつの問題単元を示し、そのまま授業に使えるものであった。これらの問題単元は、比較的地理的なもの、比較的歴史的なもの、比較的政経的なものになっていたが、地理的なものも「わが国のいなかの生産生活は、どのように営まれているか」（1年）、「近代工業はどのように発達し、社会の状態や活動にどんな影響を与えてきたか」（2年）のように、系統地理的色彩の濃い内容といえよう。なお、中学校社会科の文部省著作教科書は、全18単元のうち14種も発行された。

高等学校社会科は、1学年に5単位の一般社会が必修、2・3学年で各5単位の東洋史・西洋史・人文地理・時事問題の4つの科目のうちから最低1科目を選択することとなった。なお翌24年から東洋史・西洋史が日本史・世界史と変更された。ところで、この中の社会科人文地理であるが、教科書『人文地理』がいち早く昭和22年に刊行された。これは1種検定本で、準国定と見てよい。その内容は、戦前の中学校における地理通論のうち自然地理的事項を理科地学にゆずり、人文地理的事項を系統地理的記述にしたもので、明治以来の学校における地理教育の主流を構成してきた地誌中心主義を捨てたものであった。

アメリカのいわゆる進歩派の経験主義教育の影響を強く受けて発足したわが国の社会科において、地理教育はコペルニクスの転回をした。小・中学校では、地理という形で大きくまとめられた単元はほとんどなく、わずかに高校において人文地理科が置かれたに過ぎなかった。しかし小・中学校の各単元のそれぞれには地理的内容が豊富に含まれており、文字通り融合社会科という性格になっていた。ともあれ、地誌や自然地理に重きを置いた、旧い形の地理教育は姿を消し、新しく系統地理的アプローチが颯爽として登場してきたのである。なお、地理は、歴史にくらべて比較的スムーズに社会科に同調したが、戦前の地理教育のなかに社会科移行の蓋然性を指摘する論者もある。^(註7)

昭和26年に小・中・高校とも学習指導要領が改訂された。しかし、昭和22年版の大綱が継承されて、部分的手直しとあってよかった。

二 社会科の後退 新設の社会科は、アメリカ直輸入の感がつよく、わが国の風土に馴染みたいところがあった。昭和27年に講和条約が発効して日本は独立を回復し、教育界にも国民主義と国際主義、系統カリキュラムと経験カリキュラムなどの論議がさかんになり、地理歴史教育の強化や道徳教育の復活を主張する動向が表面化してきた。

そこで、社会科単独の指導要領改訂が小・中学校では昭和30年に行われた。授業時数は変わらなかった。小学校社会科には、5学年に産業学習、6学年の一部に世界地理学習がはいり、昭和30年から地図帳が教科書として検定されるようになった。中学校社会科では、具体的目標と内容が地理的分野、歴史的分野、政治・経済・社会的分野に分けて示され、それまで社会科日本史を別コースとして学習させることを廃止したのであった。地理的分野の内容

は (1)日本の諸地域、(2)全体としての日本、(3)世界の諸地域、(4)全体としての世界、(5)郷土、とされて、日本地理・世界地理を学習することとなり、それにつづく教科書編集と検定の過程の中で、中学1学年は地理学習であるという通念が確立された。

また、昭和31年改訂の高等学校社会科については、各科目の単位数が、従前の5単位一本から3～5単位になり、必修科目数が従前の一般社会5単位を含めて2科目10単位から社会を含めて3科目9単位になった。人文地理の目標が8項目掲げられ、内容の13項目のうち地誌学習ができるように「国家と国際社会」が加えられたが、依然系統地理的内容であった。また「人間生活に大きくはたらく自然条件」の項目が加えられたのも注目された。

総じていえば、このたびの改訂によって、総合社会科乃至一般社会科から分科社会科へ、経験主義・生活主義から系統学習へという転換が行われた。アメリカ流社会科の後退といえよう。この傾向は、昭和33年告示の小・中学校および同35年告示の高校の学習指導要領により延長され、強化された。

これによれば、週当たり授業時数は、小学校1・2学年各2、3～6学年各4、中学校1学年4、2学年5、3学年4とされた。小学校社会科には、学年の主眼や各学年の学習領域案は示されず、内容は文章体であり、部分的に地理的内容が強化されたところがあった。中学校社会科においては、分野別学習の学年指定を行ない、原則として1学年は地理的分野ということになった。内要の配列は(1)郷土、(2)日本の諸地域、(3)全体としての日本、(4)世界の諸地域、(5)全体としての世界、となり地誌的指導に重的を置くことに転換した。高等学校では、人文地理の名称が消えて1学年に地理A(標準単位数3)または地理B(4)、2学年に倫理・社会(2)と世界史A(3)または分割学習の世界史B(標準単位4のうち2)、3学年に政治・経済(2)、日本史(3)および世界史B(のこり2単位)のように学年指定および全科目必修となった。地理Aが8項目の、地理Bが12項目の内容を掲げたが表現が変っても昭和31年版のものを継承するに過ぎなかった。

三 分科社会科と地理教育 学習指導要領は、小学校が昭和43年に、中学校が44年に、高等学校が45年に改訂され、それぞれ46年、47年、48年から全面实施となった。

小学校社会科の地理的内容では、6学年の「世界の国々」が世界の諸地域ともよぶべき内容に変わったことがあげられる。これは、世界の熱帯、極地や寒冷な地方、乾燥した草原や砂漠、南半球の温帯の自然と人々の生活を、具体的事例をあげてその特色を理解させようとしたもので、中学校地理的分野のなかの世界の諸地域の学習の基礎コースとして位置づけられている。授業時数も昭和33年版と同じである。

中学校社会科の地理的分野の内容は、(1)身近な地域、(2)日本とその諸地域、(3)世界とその諸地域、(4)世界の中の日本、の4大項目から構成された。昭和33年改訂のものにくらべて、身近な地域から日本、世界へと学習対象を拡大させた後で、ふたたび日本にもどり、広い視野に立って国土認識を深めようとするものである。このたびの中学校社会科でのより大きな改訂は、歴史的分野と平行して地理的分野が、1～2学年の2か年にわたって指導されることになったことである。

高等学校の社会科では、系統地理を中心とする地理A(標準単位数3)と世界地誌を中心とする地理B(3)が設けられ、地理はふたたび選択科目にもどった。すなわち、社会科履修については、倫理・社会(2)、政治・経済(2)の2科目必修、日本史(3)、世界史(3)、地理Aまたは地理Bのうちから2科目選択とされた。ともあれ、地理Bにおいては内容の3大

項目のうち「世界の諸地域」に年間授業時数のおよそ3分の2を充て、「世界をいくつかの地域に区分し、それぞれの地域で取り扱う内容については、適切に構成すること」と指示して、初めて世界地誌の系統学習を打ち出したのである。地理Aは、昭和35年版の地理Bをほぼそっくり踏襲し、内容は従前のものを4大項目に整理したに過ぎなかった。ともあれ、^(註8) 高校地理教育において系統地理と地誌と両方の学習を指導する機会が提供されたのであった。

昭和52年の小・中学校の、昭和53年の高等学校の学習指導要領は、改訂がかなり大幅なものになり、小学校が55年から、中学校が56年から、高校が59年から全面的に実施される予定である。これによれば週当たり授業時数は、小学校1・2学年各2、3～6学年各3；中学校1・2学年各4、3学年3で、それぞれ従来よりも減少する。

小学校社会科の地理的内容は、3学年で地域における人々の生活と自然環境、生産活動と消費生活を中心とした人々の生活と他域との比較、4学年では3項目中の1つで、国内の特色ある地域、5学年でわが国の国土における食料生産、わが国の国土における工業生産、地理的環境としての国土の特色、6学年なし。ここでは、身近な地域を通して地理学習の基礎を得させ、ついで日本地理に及ぶが、系統地理的アプローチを主とするといえよう。

中学校社会科における地理的分野は、歴史的分野と平行して1・2学年での学習が指定されることは現行と同じであるが、その内容は(1)世界史とその諸地域、(2)日本とその諸地域、(3)世界の中の日本、の順序で取り扱うことにされ、現行のものでは独立した項目の身近な地域が日本とその諸地域のなかに入れられている。ここでは地誌学習が中心であり、小学校の日本地理学習のあとをうけて世界地理学習へと連続するように意図されている。

高校社会科は、1学年に新設の現代社会(標準単位数4)が必修とされ、日本史(4)、世界史(4)、地理(4)、倫理(2)、政治・経済(2)が選択科目とされる。地理の内容は、現行地理Aの系譜に属し、系統地理学習を主とする。新指導要領の指示する地理教育は、小・中・高校と学問的にも筋が通り、一貫してそれなりに納得できるものであるが、高校における地誌の系統学習の機会が失われるのも事実である。

以上のごとく、戦後の地理教育は、社会科教育の一環としての役割を担うに過ぎないところから、しだいに独立的科目の性格を濃くし、とくに中等教育において然りである。そして、前期中等教育において地誌教育が、後期中等教育において系統地理教育が行われるというのが定式化したといえよう。

(註1) 石川謙「地理科往來物についての研究」『教育論叢』26巻 昭和6年

石川謙『日本教科書大系 往來篇第9巻 地理一』講談社 昭和42年、『同第10巻 地理二』昭和42年、『同別巻二 統往來物系譜』昭和52年

(註2) 中川浩一「近代地理教育の源流」古今書院 昭和53年

『現代地理教育講座 第2巻』古今書院 昭和50年 所収、中川浩一「日本の地理教育の歩みと動向」『教育学辞典 第3巻』岩波書店 昭和13年 所収、細谷俊夫「地理教材史」「地理教授」『日本教科書大系 近代篇第15巻 地理1』講談社 昭和40年

(註3) 小学校8年の課程が、初等科3年、中等科3年、高等科2年に区分されていた。

(註4) 中川『前掲書』224-225頁

(註5) 『日本教科書大系 近代篇第16巻 地理2』昭和40年、『同第17巻 地理3』昭和41年 田中啓爾『地理教育に関する論文集 再増補版』目黒書店 昭和8年

(註6) 『現代地理教育講座 第2巻』所収 朝倉隆太郎、品田毅、菊地光秋「社会科における地理教育」『地理、その教育』葵書房 昭和42年

『社会科教育史資料 第1～4巻』東京法令出版 昭和49～52年

文部省『学習指導要領』昭和43～53年

(註7) 『現代地理教育講座 第2巻』177-179頁

(註8) 『地理の広場』第33号 全国地理教育研究会 昭和53年 7-8頁

千種高桑名誠一教諭によって、名古屋の高等学校の地理担当教員が現行の地理Aまたは地理Bをやっている理由が列挙されている。これを紹介すると、**地理A**をやるのは、○地理Bは中学校のむしかえしになりがちである。○地理Bだとしても内容が浅くなる。○地誌的内容は変化も激しく、新しい情報を集約しきれない。教授法、内容に自信がない。○自然地理と人文地理が系統的にできる。国別で手薄になるところを補うようにしている。○ある特定のテーマについて詳細に展開できる。○系統地理により授業に変化をもたせうる。○従前の人文地理を継続する。○地理として考える能力をつけさせるには地理Aの方がよいと思う。さらに受験に有利と思う。○より体系的知識が得られ、羅列的知識で終らない点、入試の際、便利である。○最終的には地理Aも地理Bも同じ、過程が異なるのみだから。**地理B**をやるのは、○基礎が不十分で、基礎をしっかりとらせるために。○地誌の方が重複が少なく、地域の特色、問題点をとらえやすい。○地理Aが蓋列的学習で勉強のための勉強であるのに対して、地理Bは比較的問題点を追求できる。○地域社会の特色は国及び国の所属している地域体制を軸としてとらえるのがよい。○国際理解のための地理教育は地誌によって完成させること、またそのために戦前の地誌とちがう新しい地誌をどのように創造したらよいかに取り組むために。

世界地誌学習の取り扱い

現行の地理Bの学習内容の中心は、世界地誌である。そこでこれから、今日までの実際の地理教育において、世界地誌教授がどのように行われたかを、主として教科書を手掛りにして考察してみたい。

地域区分と配列 地誌学では地域区分は第一義に考えねばならない重要な問題である。地誌の研究は、地域を選び、その区分を定め、そして区分された地域について、現地調査や統計・文献などの調査を行ない、集めた資料の分析と評価を行ない、他地域との比較を行って、その地域性を明かにし、そして地誌として叙述する。したがって、地域区分には地域の本質をめぐって多くの検討がなされてきた。

いま、世界地理学習に限ってみても、地域区分は、従来の大陸別区分法だけでなく、教授目的あるいは方法から幾種類も考えられる。

まず、高校地理Bの昭和54年度使用予定の教科書11種のうち9種について、「世界の諸地域」のもっとも粗大な地域区分をその配列とともに、つぎに列挙する。(教科書番号順)

(1) 中教 『改訂新版 地理B』

I ヨーロッパ II ソビエト連邦 III アングロアメリカ IV ラテンアメリカ
V オセアニア VI アフリカ VII アジア VIII 日本

(2) 東京書籍 『改訂 地理B』

I 西ヨーロッパ II アングロアメリカ・オセアニア III ソ連・東ヨーロッパ
IV ラテンアメリカ V 西南アジア・アフリカ VI 南アジア・東南アジア
VII 東アジア

(3) 清水 『地理B 最新版』

I アジア II 西南アジアと北アフリカ III アフリカ IV ヨーロッパ
V ソビエト連邦と東ヨーロッパ VI アングロアメリカ VII ラテンアメリカ
VIII オーストラリアと太平洋地域 IX 日本 X これからの空間(海洋、両極)

(4) 二宮 『高校新地理B 三訂版』

- I モンスーンアジア II 乾燥アジアとアフリカ III ソビエト連邦と東ヨーロッパ
- IV ヨーロッパ V アングロアメリカと北極地方 VI ラテンアメリカ
- VII オセアと南極大陸

(5) 帝国 『高等世界地理 B 三訂版』, 『高等学校 新世界地理 B 三訂版』

- I アジア II 太平洋とそれを囲む新大陸の諸地域(合衆国 北アメリカ北部 ラテンアメリカの国々 オーストラリアとニュージーランド 太平洋とその島々) III ソ連とヨーロッパ東部
- IV ヨーロッパ西部とアフリカ

(6) 数研 『三訂版 高等学校 地理 B』

- I ヨーロッパ II ソ連 III アジア IV アフリカ V アングロアメリカ
- VI ラテンアメリカ VII オセアニア VIII 日本

(7) 教育出版 『最新 地理 B 地誌』

- I 西ヨーロッパ II アングロアメリカ III オセアニア IV ラテンアメリカ
- V 東南アジアと南アジア VI 西アジアとアフリカ VII ソ連と東ヨーロッパ
- VIII 東アジア IX 日本 X 両極と海洋

(8) 山川 『世界地誌(再訂版)』

- I ユーラシア(東アジア 東南アジア 南アジア 西南アジア 西ヨーロッパ)
- II アフリカ III アメリカ IV オセアニア・南極 V 日本

アジアから始めるもの4, ヨーロッパから始めるもの4, 最終に日本を置くもの6。最後の日本を除外してみても(海洋, 極を無視して), オセアニアで終るもの4, アジアで終るもの3, ヨーロッパで終るもの3。かなりさまざまであるが, どれも常識的である。教科書のもつ性格から考えてこれでよく, これを使用する教授者が, あとどのようにも活用すればよいわけである。

つぎに, 世界地誌学習の一貫性からみて, 中学校と高等学校の世界地誌における地域区分を対比させてみたい。便宜上同一出版社の教科書を使用してみる。

中教『日本と世界の国々』—中学校—	中教『地理 B』—高等学校—
世界とその諸地域	世界の諸地域
I 世界の自然と人々	I ヨーロッパ
1. 地球儀と世界地図	1. ヨーロッパの社会と自然
2. 世界の陸地と海岸	(1) 歴史的背景と社会の現況
3. 世界の気候と植生	(2) 自然環境
4. 世界の人々	2. 西ヨーロッパ
II 世界の諸地域	(1) ヨーロッパの中心地域
世界の諸地域の分けかた	(2) 農牧業
1. アジア	(3) 地下資源と工業
(1) 土地と人々	(4) 社会と文化
(2) 東アジアの国々	3. 北ヨーロッパ
(3) 東南アジアの国々	(1) 社会と自然
(4) 南アジアの国々	(2) 資源と産業
(5) 西南アジアの国々	4. 南ヨーロッパ
2. ソビエト連邦	(1) 社会と歴史

— 中学校 —

- (1) 土地と人々
 - (2) ソビエト連邦の産業
 3. ヨーロッパ
 - (1) 土地と人々
 - (2) 東ヨーロッパの国々
 - (3) 西ヨーロッパの国々
 - (4) 北ヨーロッパの国々
 - (5) 南ヨーロッパの国々
 4. アフリカ
 - (1) 土地と人々
 - (2) アフリカの国々
 5. アングロアメリカ
 - (1) 土地と人々
 - (2) アメリカ合衆国
 - (3) カナダ
 6. ラテンアメリカ
 - (1) 土地と人々
 - (2) 中部アメリカの国々
 - (3) 南アメリカの国々
 7. オセアニア
 - (1) 土地と人々
 - (2) オーストラリア
 - (3) オセアニアの島々
 8. 北極地方と南極地方
- Ⅲ 世界の諸地域の結びつき
1. 世界の交通・通信
 2. 世界の貿易

— 高等学校 —

- (2) 資源と産業
 5. 東ヨーロッパ
 - (1) 社会主義体制の成立
 - (2) 自然と産業
- Ⅱ ソビエト連邦
1. ソビエト連邦の社会と自然
 - (1) 歴史的背景と社会の現況
 - (2) 自然環境
 2. 産業
 - (1) 農業
 - (2) 地下資源と工業
 - (3) 中央アジアとシベリアの開発
- Ⅲ アングロアメリカ
1. アングロアメリカの社会と自然
 - (1) 歴史的背景と社会の現況
 - (2) 自然環境
 2. アメリカ合衆国
 - (1) 農牧業
 - (2) 地下資源と工業
 - (3) 商業と貿易
 - (4) 民族と社会
 3. カナダ・アラスカ
 - (1) 資源と産業
 - (2) 民族と社会
 4. 北極地方
- Ⅳ ラテンアメリカ
1. ラテンアメリカの社会と自然
 - (1) 歴史的背景と社会の現況
 - (2) 自然環境
 2. 中部アメリカ
 3. ベネズエラとアンデス諸国
 4. ブラジル
 5. 温帯南アメリカ
 6. 南極地方
- Ⅴ オセアニア
1. オセアニアの社会と自然
 - (1) 歴史的背景と社会の現況
 - (2) 自然環境
 2. オーストラリア

— 中学校 —

— 高等学校 —

3. 太平洋の島々

V アフリカ

1. アフリカの社会と自然

(1) 歴史的背景と社会の現況

(2) 自然環境

2. 北部アフリカ

3. 中部アフリカ

4. 南部アフリカ

VI アジア

1. アジアの社会と自然

(1) 歴史的背景と社会の現況

(2) 自然環境

2. 西アジア

(1) 国際的位置と社会

(2) 石油資源の開発

(3) 農業

3. 南アジア

(1) 歴史と社会

(2) 産業と貿易

4. 東南アジア

(1) 歴史と社会

(2) 産業と貿易

5. 東アジア

(1) 中国を中心とする文化圏

(2) 農業

(3) 地下資源と工業

(4) 貿易

VII 日本

1. 経済の発展

2. 産業の特色

3. 経済発展にともなう諸問題

ついでに、地誌教育全盛期の戦前における世界地理の地域区分の実例を示す。小学校は、文部省『尋常小学地理書 卷二』(昭和11年)、中学校は、小川琢治『中等新地理 外国之部』(富山房 昭和12年)によった。

— 尋常小学校 —

I アジヤ洲(亜細亜洲)

1. 総論

山地と産業 低地と産業 交通

2. 満洲

— 旧制中学校 —

I アジヤ洲

1. 緒論

2. 満洲国

3. 支那

— 尋常小学校 —

- 区域・面積・人口 地勢 気候・
産業 交通・都邑 満洲と我が国
との関係
3. 支那(中華民国)
区域 支那本部 農業・工業・
牧畜 鉱業 交通・貿易 蒙古
我が国と支那との関係
4. シベリヤ
地勢・産業 都邑・交通
5. 印度
気候・産業・都邑
6. 東南アジア
印度支那半島 マレー諸島
- II ヨーロッパ洲(欧羅巴洲)
区域 地勢 産業(農業 牧畜
林業 水産業 鉱業・工業) 交通・
貿易 イギリス(英吉利) フラン
ス(仏蘭西) イタリア(伊太利)
ドイツ(独逸) ロシヤ(露西亜)
その他 我が国との関係
- III アフリカ洲(阿弗利加洲)
区域 地勢 エジプト 南アフリ
カ連邦 交通
- IV 北アメリカ洲(北亜米利加洲)
区域 地勢 産業(農業・牧畜・
林業 水産業 鉱業・工業・貿易)
交通 我が国との関係
- V 南アメリカ洲(南亜米利加洲)
区域 地勢 気候・産業 交通
わが国との関係
- VI 大洋洲
区域 オーストラリヤ 諸島
- VII 世界と日本
六大洲 三大洋 わが国

— 旧制中学校 —

4. インド支那
5. マレー群島
6. インド
7. 西部アジア
(1) イラン高原
(2) メソポタミヤ
(3) トルコ
(4) アラビア・シリヤ
8. コーカシヤ
9. 露領中央アジア
10. シベリヤ
11. 総論
(1) 地文
(2) 人文
- II ヨーロッパ洲
1. 緒論
2. 東部ヨーロッパ
(1) ロシヤ
(2) バルチック沿岸諸国
3. 北部ヨーロッパ
(1) フィンランド
(2) スカンデナヴィヤ
(3) デンマーク
4. 中央ヨーロッパ
(1) ポーランド
(2) ドイツ
(3) スイス
(4) ダニューブ河流域諸国
(5) オランダ及びベルギー
5. 西部ヨーロッパ
(1) イギリス及びアイルランド
(2) フランス
6. 南部ヨーロッパ
(1) イベリア半島
(2) イタリア
(3) バルカン半島
7. 総論
(1) 地文
(2) 人文

Ⅲ アフリカ洲

1. 緒論
2. 北部
 エジプト アトラス地方
3. スーダン及びギニー
4. 東部
5. 中部
6. 南部
 南アフリカ連邦 ロードシャ
7. 総論

Ⅳ 北アメリカ洲

1. 緒論
2. カナダ
 ニューファンドランド
3. アラスカ
4. アメリカ合衆国
5. 南部
 メキシコ
6. カリブ海沿岸地方
 - (1) 中央アメリカ
 - (2) 西インド諸島
7. 総論

Ⅴ 南アメリカ洲

1. 緒論
2. 北部
3. ブラジル
4. 南部
5. 西部
6. 総論

Ⅵ 大洋洲

1. 緒論
2. オーストラリア連邦
 ニュージーランド
3. 太平洋諸島
 - (1) メラネシヤ
 - (2) ポリネシヤ・ミクロネシヤ

Ⅶ 両極地方

1. 北極地方
2. 南極地方

なお、この地理の学習は、尋常小学校6学年において週当たり2時間、旧制中学校2・3・4学年において週当たり各1時間、あるいは1学年2時間と2学年1時間のいずれかで行われたのであった。ここで気付くことは、小学校においても、わが国の近隣地域についてかなり詳細に学習していること、ヨーロッパの精しさにくらべてアメリカ合衆国が大まかに取り扱われること、わが国との関係を注意しながら世界6大州すべて採り上げていることなどである。中学校においては、実際の教授状況はここで論外にして、悉皆記述であり、現行の高校地理Bの世界地誌の地域区分とくらべると、丹念さでもいうべきものが感じられる。

しかし、戦前、戦後を通じて、世界地誌の地域区分には国別方式が主調となっている。戦後の教科書のなかにも、例えば中教の『地理B』のように国別地誌叙述を避けようと工夫しているものがある。しかし、一定紙幅内に一定量の世界地誌の情報を記載しなければならない教科書の性格から、国別叙述がもっとも便宜的なのであろう。問題は、これらのような国別方式地域区分による教科書を、どのように授業において活用するかである。

内容の程度 つぎに、地誌記述の具体的内容を検討してみたい。

中学校社会科地理的分野のなかの世界とその諸地域について、昭和44年版学習指導要領は、「生活舞台としての地球、世界の自然、位置と歴史的背景、自然の特色、住民と人口、資源の開発と産業、世界の結びつきの学習を通して、地球とその上で営まれている世界の人々の生活を大観させ、その多様性に着目させる。また、世界の諸地域における産業の特色、地域相互の関連、おもな地域または国が世界の中で果している役割などを理解させる。その際、各地域の変化や動向、当面している地理的諸問題にも関心をもたせ、それらの中から学ぶべきものを得ようとする態度を育てる」と、その取り扱いを述べている。

高等学校地理Bのなかの世界の諸地域について、昭和45年版学習指導要領は、「それぞれの地域で取り扱う内容について、以下の諸項目を考慮して適切に構成すること」と、いわゆる窓方式として、位置・領域と歴史的背景、自然環境の特色、住民と人口、産業・経済の現状と動向、日本との関係の諸項目を掲げている。

両者を比較すると、中学と高校は同じ観点から地誌を学習することになっている。学習にあてる時間数は、中学校の世界とその諸地域は全体のおよそ $\frac{2}{5}$ であるから、規定の時間を完全に実施したとして56時間、高校の方は世界の諸地域が全体のおよそ $\frac{2}{3}$ であり、標準単位で実施した場合は70時間となる。この面から、高等学校の方が中学校よりも多いから、より濃い密度や深さで学習することができるわけである。

これから、内容の程度の比較のため、各種の教科書のある同一地域についてのそれぞれの記述を羅列してみたい。いま、フランスについてどう記載されているか、しらべることにする。もちろん、ヨーロッパ州や西ヨーロッパの概説をうけてフランス地誌が述べられるのが普通であるから、フランス単独の叙述だけでは完全な比較にならないが、ここでは紙幅の関係からこのような概説部分を無視することにする。

まず、現在の高校と中学とを対比し、東書の『地理B』と中教の『日本と世界の国々』によることとする。

— 高等学校 —

フランス

フランスは、イギリスやドイツよりも早くから文化が開け、すでに中世にはヨーロッパ

— 中学校 —

フランス

〔おだやかな自然と古い文化〕大西洋と地中海にはさまれたフランスは、東にアルプス、

— 高等学校 —

文化の中心となり、フランス語はヨーロッパの知識階級の言語や外交用語としてひろく用いられた。18世紀末にはフランス革命がおこり、王政を廃止し、共和国をうちたてた。

現在、西ヨーロッパではもっとも有力な農業国であるとともに、西ドイツにつぐ工業国でもある。1957年以来、E Cの重要な構成国として国力の発展に努めている。

資源と産業

鉱工業 フランスは、産業革命後、長い間工業の発展は緩慢であり、伝統的な軽工業が輸出をささえてきた。しかし、第二次世界大戦後、重化学工業がめざましく発展してイギリスをしのご工業国になった。

鉄鉱は豊富であるが、石炭にはあまりめぐまれない。近年は、とくに輸入原油への依存度が高まりつつある。石炭・ガス・電力の基幹産業は第二次世界大戦後国有化され、経済計画にも国家規則によるしくみを採用している。重化学工業は、民間の大企業が中心となって高度成長をとげてきた。また、西ヨーロッパ最大の生産をあげるようになった自動車工業では、国営企業と合衆国系企業が生産の半ば以上を占めている。

鉱工業の地域 鉱工業は北部に集中し、ローヌ川流域をのぞくと、南部は工業化からとり残されてきた。鉄鉱産地のロレーヌ地方や石炭産地のリール地方にはおもに素材工業が、大消費地をひかえたパリ周辺にはおもに消費材工業が発達している。国の工業化政策にしたがって、北部のダンケルクに輸入鉄鉱による臨海製鉄所が、南部のマルセイユなどの石油輸入港付近には石油化学工場が建設された。

農牧業 国土の60%が農地として利用され、耕地面積はイギリスと西ドイツを合わせたよりも広い。気候は全般に温暖で、各地ではぶどうが栽培されている。小麦・とうもろこし・牛肉・牛乳の生産は西ヨーロッパ諸国中もっとも多く、農産物の生産額は合衆国・ソ連についている。農業経営は、家族労働力にたよ

— 中学校 —

南にピレネーの山脈があり、西部と北部に平野が開けている。南東部にあるローヌ川の谷は、むかしからヨーロッパの南北をつなぐ交通路として重要であった。1年間を通じて適度の雨がある温暖な気候で、美しい風景にもめぐまれている。

フランスは、中世以来ヨーロッパ文化の中心地であり、その国民性は、芸術にすぐれ、自由を愛好し、フランス革命によって民主政治の道を開いた。第二次世界大戦後は、海外の多くの植民地が独立したので、それらをまとめてフランス共同体を形成したり、E Cに加盟したりして、国の発展に努めている。

〔発展する工業〕 フランスでは、ベルギーやドイツとの国境に近い地方、とくにロレーヌには、鉄鉱石が豊富に産出されるので、国内やE C域内などの石炭の供給を受けて、鉄鋼業や機械工業が発達している。

パリ付近では、自動車・航空機・鉄道車両などの工業がさかんで、最近、各地に化学工業が発達してきた。地中海沿岸では、ボーキサイトと天然ガスが開発され、マルセイユは、アルミニウムの精錬・石油精製・石油化学工業がさかんである。このほか、伝統的な北フランスの綿・羊毛工業、リヨン付近の絹織物工業がある。

貿易は、輸出入とも工業製品・食品が多く、E C加盟国との割合が増加している。

〔さかんな農業〕 有業人口の約5分の1が農民で、その多くは堅実な中小自作農である。小麦の栽培がさかんで、その輸出国として知られ、また、牛の飼育も多い。ぶどうの栽培とぶどう酒の生産は、世界に名高い。

— 高等学校 —

る中小規模の自作農がおもであるが、平均経営規模は約20haで、イギリスをのぞくEC諸国のなかではもっとも大きい。第二次世界大戦後は農業への投資がさかになり、機械化がすすむなかで主要作物の土地生産性も向上している。こうして農業の国際競争力が急速に高まり、ECの穀倉としての性格を強めている。しかし国内においては、農業経営の地域格差の大きいことが問題である。

農業地域 北東部は、おもに小麦・てんさいを栽培する混合農業地域で、資本主義的大経営のみられる輸出農業地域である。北西部は酪農地域であるが、経営規模は小さく、離農がすすみ、人口流出がはげしい。南部では地中海型の農業が営まれているが、近年、労働力不足のため穀作に転ずる動きがみられる。

つぎに、国内地誌の記述がかなり詳しい帝国の『高等世界地理B』と、戦前の中学校地理教科書『中等新地理 外国之部』（前掲）とを対比引用してみる。

— 高等学校 —

フランス

北の文化と南の文化 ケルト族やゲルマン系のフランク族が住んでいた北部の農村地帯に、ギリシア・ローマの影響を受けた南の都市文化が地中海岸から北進してとけ込み、フランス言語と文化が形成された。イギリスから農業改革と産業革命の経験を、ドイツから金融業や化学を、イタリアから芸術と絹織物業を、イベリヤ半島の人々の手を通して新大陸原産の作物とその栽培技術を受け入れた。フランスは外来文明を受け入れやすい十字路にあって、人々はそれらを融合することに長じていた。

温和な国土 ケスタ地形のパリ盆地が北に広がり、その南には中央高地をはさんで古い二つの山系がV字をつくるように配列している。さらに、アキテーヌ盆地の外がわにピレネーが、ローヌ川流域平野の外がわにジュラ・アルプスの諸山脈が連なる。国の輪郭が六角形に近く、南東に高く北西にゆるやかに傾き、

— 中学校 —

— 旧制中学校 —

フランス（仏蘭西、共和国）

〔地文〕大西洋と地中海とに面し、東北の一隅を除く外、山脈・河・海岸等の天然の国境を有する。東南にはアルプスがイタリアとの境を画し、その中に欧州の最高峰モンブランがある。その西にはローヌ河谷を隔ててオーヴェルニュ高原（中央高原）があり、その中には消火山が多い。この高原はなほ東北に続いて南ドイツに及ぶ。スペインとの境にはアルプスに類する峻しいピレネース山脈が連り、西北のブルターニュ・ノルマンディーの二半島は地味の瘠せた丘陵をなす。その他は国内一般に平坦である。ローヌ河を除き、セイヌ・ロアール・ガロンヌ等の大河は、皆オーヴェルニュ高原に発し、北又は西に流れ、それらの流域はパリ一盆地・アキテーヌ盆地の如き沃野がある。又これらの河は流が緩かで水量が多く、河口には良港があり、互に連絡され、重要な内陸水路をなす。イギリス海峡沿岸とローヌ川以東の地中海岸とは出入に富み、良

— 高等学校 —

西流する河川は長くて傾斜がゆるい。西岸海洋性・地中海性・内陸性・高山性の諸気候区に分れるが、おおむね気候が温和で、国民は「ラ＝ドゥース＝フランス」と自称してきた。人口の停滞と経済活動 フランスは、19世紀のはじめごろまでヨーロッパではもっとも人口の多い国であったが、1830年代から出生率が低下して人口は停滞し、このことが産業を発展させる労働力の不足をもたらした。そのために各地の農場や工場に、常時または季節的な労働者をイタリア・スペイン・ポルトガルなどから迎え入れざるをえなくなった。現在は、労働者の出身地がアルジェリアやフランス共同体所属のアフリカ諸国に広がっている。人口がいっこうにふえない悩みは、近年少しは解消したが、釣鐘型の人口ピラミッドには国の将来を憂える声が高い。

フランスはECのなかでやや農業国の性格をもつが、農業の生産性は高くなかった。そのため第2次世界大戦後は、動力化・機械化をはかり、細長くくぎられて飛び地の多い農地を整理するなどの事業が進められてきた。しかし、この事業はパリ盆地の大規模な小麦栽培地域では容易であるが、中・小規模経営の多い南部のぶどう栽培地域ではむずかしい。

他のEC諸国に比べて産業の近代化が遅れていたが、世界的な香水・服飾・食品・繊維の諸工業のほか、北東部の鉄鉱や南西部の石油・天然ガスの開発が進み、旧植民地からも原料を輸入して重化学工業が発達してきた。現在は東西の地域間における均衡の達成に努力している。

首都パリと大都市圏 セーヌ川のシテ島からおこった首都パリは、芸術や文化の世界的な中心である。装飾品・工芸品をつくる都心部の町工場、周辺部の機械・化学・自動車・航空機工場は、農村地域の過疎化という犠牲をともしつつ全国から労働力を集めてきた。しかし歴史的な観光都市であるため、市内の

— 旧制中学校 —

港が多いが、ビスケー湾岸と地中海岸の西半とには砂丘が発達している。なお地中海中のコルシカ島もこの国に属する。気候は甚だ温和で、雨量は西部に多く、南部は地中海性気候である。

〔人文〕耕地は全国の半ばに近く、地味・気候がよいので、農業が第一の産業をなし、小麦の産は国民常食の大部を供給する。その他、燕麦・大麦・玉蜀黍・馬鈴薯・甜菜・亜麻等は大抵国内の需要を充たす。葡萄は西北部を除いて各地に栽培され、葡萄酒は産額・品質共に世界第一である。その他南部にオリーブ、北部に苹果を産し、ローヌ河谷には養蠶・絹織物業が行われ、北部には牧畜・酪農が盛んである。大西洋方面には水産が多い。石炭は東北部に産するが、英・独からの輸入も多い。アルプス・ピレニースには水力の利用も盛んである。鉄鉱はローレーヌ地方に豊富である。石炭の不足から大工業の発達は英・独に及ばないが、国民は美術工芸に長じ、発明を得意とするので、最近の発達著しく、機業（絹を主とし、木綿・羊毛・麻・人造絹等）・製鉄・アルミニウム精錬・服飾品・装身具・贅沢品等の製造が多い。その産業は国内供給を目的とするものが多いから世界経済の変動に影響されること少く、又貿易の輸入超過は観光客・海外投資・海運等の収入によって補われる。輸出は織物・化学製品・葡萄酒・鉄材を主とし、輸入は綿花・羊毛・生糸・石炭等である。道路・鉄道・内陸水路・航空路はよく発達し、特にパリは大陸交通の中心をなしている。

位置・地勢・気候の良好な割合に人口密度が小さく、且つ人口は殆ど増加しない。原住民のケルト族の子孫はブルターニュ半島に住む。現在のフランス人はこの原住民がローマの文化を受け、これにチウトン族の血を混えたもので、その言語・文化は全くラテン系統で、大抵旧教を信じ、学術・文学・美術に長

— 高等学校 —

再開発はむずかしく、郊外に多くの人口が集まって900万人をこえる大都市圏が形成され、ニュータウン計画が進行中である。

パリ盆地と北部の地域 ノートルダム大聖堂の塔上からながめると、皿状をしたパリ盆地の中心部がよくわかる。この広大な盆地はケスタ地形で、そこでは内がわにゆるく、外がわに急な傾斜をもつ丘陵が同心円状に配列し、外がわの丘陵ほど高く、地層が古い。近郊では花と野菜が栽培され、その外がわには集村や大農場の風景と、小麦・てんさいをつくる開放耕地が展開している。とくにパリの東がわの地域では、小規模な自作農や大農場に労働力を提供する人々が住む集村と、多数の常雇いや季節労働者を集め、農地を企業的に経営する大農場が並存し、ここは農業の近代化がフランスではもっとも進んだ地域となっている。

パリ盆地を西流するセーヌ川は、ルーアンやルアーブルを中心とする港湾・工業地域とパリを結ぶ大動脈である。またセーヌ川と運河で結ばれる北部でも、伝統的な毛織物工業と黒色地方の石炭開発にもとづいて工業地域が形成され、ルールを中心に連接都市が発達している。

西部の地域 二つの半島が突き出した西部は、かつてノルマン人やイギリス人が進出してきたところである。土手や樹木列が、りんごなども植えられた耕地と牧場を囲んでいる。また海岸には干拓地がある。農家が散らばり、酪農経営がさかんで、多数を占める自作農には保守的傾向が強い。ロアール川以南ではぶどうが栽培され、南西部のアキテーヌ盆地ではとうもろこしが加わり、地中海地域へと移っていく。とくにアキテーヌ盆地では、1950年代にアルジェリアから帰って丘陵地帯へ入植した農民が、大規模な機械化農業を進めてきた。ロアール川の下流では、かつてアフリカおよびアメリカ大陸との三角貿易で繁栄し

— 旧制中学校 —

じ、社交に巧みである。又フランス語は列国の外交及び社交界に用いられる。国民は民族・宗教が単一で、又貯蓄心に富み、堅実な自作農が多いので国論が統一されている。その建國甚だ古く、久しく文化・国力世界第一であった。独仏戦役後一時振わなかったが、世界大戦に勝ってアルサス・ローレーヌを回復し、国力は再び旺盛となった。海外領土は本国の二十二倍あるが、大部分はアフリカ・インド支那等の熱帯であって、開発が十分でなく、又本国の人口が増加しないので、ただ本国への原料供給地・製品市場たるに止まる。

〔処誌〕首府パリ²⁸⁹はセイヌ川に跨り、城壁を繞らし、歐洲第三の大都会である。全国の商業・交通の大中心をなし、又市街極めて壮麗、ノートルダム寺院・エッフェル塔・凱旋門・ルーヴル博物館等の宏壮な建築物、公園・劇場等の名所・古蹟に富むので、観光客が頗る多く、美術工芸品・装飾品・化粧品等はその特産で、世界流行の源泉をなしている。郊外のヴェルサイユ宮殿はルイ十四世の造営に係り、宮殿・林泉の美天下第一と称せられる。世界大戦後の講和条約もここで調印された。セイヌ河口のルアーブルはパリーの門戸をなし、英・米との取引が盛んである。

国の東北部は世界大戦の戦場であった所で、ヴェルダン¹⁷は殊に名高い。アルサスの主邑ストラスブルグは商業・交通の要地である。ルールに機業が盛である。シュールブル¹⁸・ブレスト²⁰は共に軍港で、附近の海岸は懸崖が多く、奇景に富んでいる。ロアール河流域では下流ナントの精糖業、上流サンテチエヌの製鉄業は共に盛大である。ナント・シュールブル¹⁹は又大西洋航路の起点をなす。ガロンヌ河畔のボルドー²⁶は葡萄酒の輸出で著れ、ツールーズ¹⁹は交通・商業の要地である。マルセイユ⁸⁰は地中海第一の貿易港で、アフリカ・東洋方面との貿易が盛んで、葡萄酒・植物油の輸出が多い。その東南にトゥロン軍港がある。

— 高等学校 —

たナントが、ガロンヌ川沿いでは工業都市のツールズや港湾都市のボルドーが、それぞれの地域における経済活動の中心をなし、現在は都市圏整備計画が進行中である。

東部と南部の地域 ドイツとの関係が深い東部では、ロレーヌの鉄鉱石、ライン川の水運と水力、ストラスブールなどの都市の資本と労働力が結びついて、早くから重工業地域が形成されたが、近年になって変化がおきている。ライン川と運河で結ばれたローヌ川ではTVA方式の総合開発が行われ、リヨンからサンチェヌヌにかけての工業地域がその恩恵を受けてきた。経済の遅れた中央高地に対しジュラやアルプスの山地は酪農・時計製造・観光で知られるが、いずれも自然保護地域が広がっている。古代遺跡の多い地中海沿岸は、規模のやや小さい自作農による花・ぶどう栽培地域である。その東部は世界的な保養地となり、中部にはアフリカから石油が運ばれ、フランス第2の都市マルセイユとフォス港湾工業地帯を中心に製鉄・石油関連工業が発達し、ここから石油パイプラインがドイツのカールスルーエに通じている。

これらの文章を読んで、さまざまな感想や意見があろう。かつてことあるごとにいわれた、百科全書の学科、暗記注入主義、理論上の秩序も連絡もなくただ目録のような羅列などの、地理教育に対する悪罵を思い出す。地理、とくに地誌は素朴な学問で、中等教育の高学年にも達した生徒の頭脳を快く刺戟する、高度な内容に不足する。魅力的であるための要因としては、かなり複雑な因果関係を解明するとか、各種資料によって実証するとかの授業態様があるが、このような方策からみて地誌教育においておのずから大きな制約がある。雑駁さが固有の性格である地誌においてこそ、その学習指導上効果的な情報伝達法や知識注入法が考究されねばならないのではなかろうか。

最後に、地誌学習の内容の程度について、外国の実例をみたい。そこで、系統的な地誌教育が行われているイギリスを採り上げることにする。

イギリスは、地理科を独立した教科としている。この国の中等学校は、学校の種類が多く、同種の学校でも学校によって教育課程の相違があり、さらに同じ学校の中にも異ったストリームがある。したがって、中等教育における地理科のカリキュラムは画一的に説明できない。具体例によれば、本国および外国地理は中学年において学習されるのが一般的なようである。そして統一テストとしてあまりにも有名なGCEの、地理科のOレベルの試験科目にイギリス地誌・ヨーロッパ地誌・北アメリカ地誌がある。^(註1)

— 旧制中学校 —

ここから東方沿海の地はリヴィエラと称し、気候温暖で且風景がよいので、保養・遊覧に適し、ニース・モナコ(欧州最小の独立侯国)²²は殊に著名である。ローヌ河中流のリヨン⁵⁸は絹織物を以て著れる。

我が国との関係 我が国の軍事・法律及び学芸の発達については、この国に負うところが多く、今も美術・学芸を学ぶ者が少くない。互に大使を交換し、貿易も盛んで、我が国は生糸・絹織物を売り、葡萄酒・機械・化学製品を買う。

※ 都市の下の数字は、人口を示し、単位が万人である。ちなみに、当時フランスの総人口は4,191万人だった。

いま、さきに日本の教科書の記述比較のさいに同一対象国としたフランスについて、イギリスの中等学校の使用教科書の1つである J. H. Lowry, Europe and The Soviet Union Second Edition. (1972年 London) の叙述を訳出して引用する。

この中で地名は、わが国の高校地図帳に記されるものは日本語で、出ていないものは仏語のままであらわしておいた。この教科書の本文はすべて掲載したが、紙幅などの関係で地図と写真は全部省略し、註記も一部のせなかつたものがある。

フランスは、ロシアを除いて、ヨーロッパ最大の国です。フランスはイギリス諸島の約2倍の大きさです。フランスは西ヨーロッパで卓越した政治上の位置を占めています。

フランスはそれぞれ活発な貿易ルートをもった3つの海域の海岸線をもっています。(1) それらの海域の名をあげなさい。

フランスは、ベルギー・ルクセンブルクおよびドイツと境する、攻撃され易い北東の国境をもっています。(2) 地図形はこの国境がどこで最も破られ易いと示していますか。(3) 何国が1871年から3度もフランスに侵入しましたか。

フランスは、以前は植民地大国でしたが、今ではほとんど全部の海外領土を独立させてしまいました。(4) フランスは1949年以降(a) アジアと(b) アフリカにおけるどの版図を放棄したのか探し出さなさい。

ここに掲げた地図はフランス10大地域を示すものです。いま、本書のヨーロッパ地体構造および河川流域図ときみの地図帳の地形図を開いて(5) フランスにおける山勝ちな地域3つの名をあげなさい。(6) これら高地地域のうち若い褶曲山脈から成っているところを2つあげなさい。(7) 残りの山地地域の地質年代はどうですか。(8) 浸食されて平らに近くなった山脈のブルターニュ半島はボーージュ山脈やアルデンヌ高原と何が共通しますか。

フランス自然地域、河川および動力資源(図)

(9) 地図の中の1~15の記号の河川の名を挙げなさい (10) どの天然の谷あいやまたは回廊が次の1組の地域を結びつけていますか — アキテーヌ盆地とパリ盆地 アキテーヌと地中海のフランス、パリ盆地と地中海のフランス。(11) ソーヌ川上流とローヌ川の谷を結ぶ谷あいの名を挙げなさい。

大ざっぱに言えば、フランスには3つの型の気候があります — (i) 全年節温帯で変化に乏しく湿潤、(ii) 暑く乾燥した夏と暖かく湿潤な冬、(iii) 寒い冬、暑い夏、夏に大部分の雨が降る。

(12) もういちどヨーロッパの気候を読みかえし、次の土地がそれぞれどの気候と考えるか、理由を付して答えなさい — プレスト、マルセイユ、ナンシー。(13) 既掲のヨーロッパ黄土分布図から、どの地域が黄土の肥沃な表層をもっていますか、述べなさい。(14) どの地域にフランス最大の炭田がありますか。(15) その他どの地域に小さな、散らばった石炭埋蔵がありますか。(16) アルザス・ロレーヌに埋蔵されている2大鉱物は何ですか。(17) どの地域に重要な水力発電所が分布していますか。

パリ盆地は、首都があるほかに、高度に重要な農業地域です。地図、写真および図はその地理に関する主要な事実を示しています。それらをよく調べて、(18) 次の文章を正しく完成させなさい。

パリ盆地はほぼ円形の平野である。この平野は(北部と東部、南部と西部)においてSomme川およびセーヌ川本支流によって排水される。セーヌ川の重要な支流は(A^(註2))川、(Y)川、(O)川、(M)川である。(南西部、北東部)は(L)川により排水される。構造上この盆地は大きな(背斜、向斜)あるいは窪地であり、浅皿のような、互いに重なった地層から成

ている。一番下の受け皿は（石灰岩，粘土）からできており，これと同じ岩石がこの盆地の末端に露出し，（東，西）にCôteaux du（P ）や（東，西）にCotes du（M ）のような，縁のこわれた小高い土地を形成している。別の「受け皿」の縁はÎle de France の（石灰岩，白堊）崖によって代表される。白堊と石灰岩のあいだにはさまれたものが（砂岩，粘土）の層であり，この岩石が地表に出てくるところにはシャンパーニュの（Pouilleuse，Humide）地方のような（湿った谷，乾いた高地）がある。「白堊の受け皿」はいろいろの（漂堆物，岩石）を入れている。例えば，粘土，砂岩または石灰岩，そして川砂利・黄土および沖積土のような（漂積物，岩石）である。それは小さい尾根をつくり，パリ周囲の風景を直接的に変化あるものとしている。

これらの違ったタイプの岩石や漂積物は，パリ盆地の中の人々の生活の様相に影響を与えます。主要な副地域の農業の詳細は註記に記されています。（19）この註記を使い，前掲のパリ盆地地質略図の大きなコピーに適当な符号を書き加えて「パリ盆地農業地図」を作りなさい。

パリは，シテ島として知られるセーヌ川の中の島に住んだケルト族の1つ，Parisii からその名を得ています。（（20）なぜかれらが住むのために島を選んだと考えますか）ローマ時代にパリは，北方英仏海峡諸港に達する軍用道路がセーヌ川を渡る，重要な場所となりました。この古い路線を今も示すパリ街道の名がA図に見えます。この架橋点を守備するためローマ人は砦と，川の兩岸の土地を囲む最初の防壁を建設しました。

中世にパリは急速に大きくなりました。すなわち，フランスで最も豊かな農業地帯の心臓部にあり，また多くの水路の集まる場所としての位置が，パリを自然に市場中心地にしました。パリはまたフランス王政の本拠および教会の一中心となりました。（（21）何という有名な聖堂がシテ島にありますか）

パリの卓越した位置は，18世紀末，あらゆる方向にこの都市から放射する国道の大道路網の建設によって補強されました。後出の地図はパリがまたフランス鉄道網の焦点であることを示しています。パリからの主要道路と鉄道路線によりたどられる方向がB図に表示されます。（22）大きな模写図をつくり，下の語句をそれぞれ適当な箇所に書き加えなさい——

至カレー，ブローニュおよびイギリス行きフェリー便　ローヌ・ソヌ河谷經由，至ディジョン
 および地中海のフランス　至シェルブールおよび大西洋横断航路便　至オルレアンおよびポアチエ經由アキテーヌ　至ブルターニュ　至ライン河谷諸市，例えばバーゼルやストラスブール
 至ルアン，ルアーブルおよび大西洋航路　至北東部工業地帯

現代のパリとその隣接郊外は，850万以上の人口をもち，フランスにおいて断然最大の集合都市です。パリは，首府であり，またフランスの文化・娯楽・実業そして金融の主要中心であり，ヨーロッパ大陸最大の工業中心地でもあります。石炭・木材・鉄鋼・砂糖その他の食料のような，多くの嵩ばる必需品は，大部分ルアーブルやルアンから流れをさかのぼって解で到着します。かくて多くの加工工業がセーヌ川畔や，Ourcq および St. Denis 運河近くの東部および北東部郊外に立地します。パリの莫大な種類の工業のうち重要なものの記述が右に表示されています。

パリ盆地における他の都市は2種類——(i)市場町と(ii)港——に分けられます。多くの市場町は，急崖を通り抜ける隘谷に，または路線道が河川を横断する地点に立地しています。例は，シャンパーニュ葡萄酒地方の中心のランス，ロアール川の大湾曲部にあるオルレアン，Artois

パリの主要工業
 機械工業，例
 鋳物
 鉄道車両
 工作機械
 兵器
 内燃機関
 ルノー，シトロ
 エンの自動車
 消費財，例
 婦人豪華衣類

および Picardy の主要な市場町のアミアン、そしてセーヌ川上流のトロワです。これらの都市の大部分は何らかの面で農業に関係した工業をもちます。そのような工業は農業機械の製造や地元の農産物の加工、例えば製粉・製糖やビスケット製造です。織物製造もまた最初は地元の羊の毛を使うことから発達してきたもので、広く分布しています。パリ盆地の2大港の記述は次に掲げます。この外に、ニューヘブンおよびドーバー・フォルクストーンとそれぞれ定期航行をもつジェップおよびブローニュというフェリー港があります。

煙草
加工食品
紙と書籍
石鹸と化粧品
家具
履物

ルアンは、セーヌ川のはとりにあり、数世紀間パリ盆地の大きな港でした。中程度の大きさの洋航行船の終点で外海から80マイルに位置します。船舶がだんだん大型化しますので、ルアーブルからの増加する競争に直面しています。しかしルアンはやはりパリの第1の外港です。約25万の人口がルアンを取り巻いて住んでいます。海運港は市から下流に19キロのあいだにひろがっています。上流には川解用の13キロの埠頭があります。

主要輸入品 — 石炭、石油、^{*}繊維類、^{*}鉛石、^{*}食料。

主要工業 — 綿織物、金属精錬、化学薬品、^{*}精油、機械。

^{*}パイプラインが石油をルアーブルからルアン近くの精油所まで、石油製品をルアンからパリまで運んでいます。

ルアーブルは、フランスの主要な定期船港です。北大西洋を横断する貨物貿易に従事する重要な商港です。河口のセーヌ三角江の中に遮蔽されて、ルアーブルは前世紀のうちに海洋船客交通の膨張によって急速に成長しました。市は今日約20万の人口をもち、沖積平野にありましたもの場所から隣接の白堊の台地にまで拡大しました。今進行中の開発は、最大級の船を浮かばすため深い水深の停船位置を浚渫すること、および工場用地の1万ヘクタールを干拓することです。

主要輸入品 — 石油、^{*}綿花、^{*}木材、^{*}石炭、^{*}油脂種子。

主要工業 — 造船および修繕、^{*}機械、^{*}製粉、^{*}油種压榨、^{*}精糖。

工業の北東部（フランスのフランダース）は、その小さな範囲にかかわらず、この国の主要な炭田を含んでいますから、ある観点からは現代フランスにおける最も重要な地域でした。挾炭層は Pas de Calais および Nord 地方の地下にじゅうぶんに横たわり、東方へベルギーの中にサンプル＝ミュズ炭田として続きます。この石炭は稼動するには難かしくて費用がかかり過ぎます。なぜなら、この岩石は数回褶曲をうけており、しかも炭層の多くが断層で中断されるかまたは地表まで急角度に傾斜しています。それでもなお、この炭田はフランスにとって絶対に重要です。なぜなら、それは毎年約4,700万トンの全国石炭生産高の半分以上を生産します。

主要なフランスの炭坑町は Béthune、ランス、ズーエおよびバランシェンヌです。石炭の2分の1以上は炭田において、すなわち、たいていは、坑口に立地するコークス炉、火力発電所または練炭工場において使用されています。コークス炉からの廃ガスがガスパイプラインに送られて、家庭用および工業用熱源として地域じゅうに分配されます。コークス工場からの副産物が炭田に、とくに Béthune、Liéven および Courrières に大化学工業をも起こしてきました。その多様な製品は薬品、肥料、染料、殺虫剤や洗剤です。

石炭燃焼発電所はフランスのフランダースにおいて多くの他の産業に電気を供給します。これらのうち最も重要なものが織物製造で、そのためにこの地域が長く有名でした。主要な織物の中心地はリールです。しかしこの地図は、衣服が多くの他の都市でも生産されている

ことを示します。((23) それらの都市名をいいなさい) 中世に地元で供給された羊毛と亜麻は毛織物およびリンネルを製造するために使われました。これらは今も生産されますが、今日織物工業の主分野は綿工業です。この他の工業にはリールおよびバランシェヌの鉄鋼工業および機械工業があります。海外やロレーヌからの鉄鉱はこの両市において地元のコークスでもって溶解されます。機械工業は鉄道車両と農業機具です。

この地域の主要な港はカレーとダンケルクで、両方ともドーバーまでの定期船があるフェリー港です。ダンケルクは、大量の通過貿易の取り扱いに加えて、食品加工工業および大精油所があり、より重要です。また多量の貿易がベルギーの港アントワープを通過させられ、幅広い運河および運河化された川のネットワークによってフランスの工業都市に連絡されます。北東部炭田からフランスの他の港まで石炭を輸送するさい、運河が主要な手段です。大部分船積みは(i) リールやルーベのような隣接の工業都市まで、(ii) ロレーヌの鉄鋼工業地域まで、および(iii) パリまでです。石炭積み込みの主要中心地はランスとズーエです。

(24) 前述の情報を使って、次の題についての註記の簡単な表をつくりなさい。

北東フランスの主要工業

石炭関連工業	織物製造業	鉄鋼および機械工業	港湾産業
--------	-------	-----------	------

アルザス・ロレーヌもまた、工業活動を起こしてきたきわめて重要な鉱産資源を埋蔵しています。(25) 右表中の各商品について、全フランス生産高のうちアルザス・ロレーヌで何パーセントが生産されていますか。

主要商品の年生産高
(100万トン)

ロレーヌのミネット鉄鉱が最も重要です。鉄鉱はCotes de Moselleの石灰岩の地層が浅いところに見られます。これは、ヨーロッパ最大の鉄鉱床ですが、含有される燐を取り除くことが可能になりました1879年から開発されています。ロレーヌ鉄の鉄含有がまったく低く—25%と35%の間です。多量の鉄石がルクセンブルグ・ベルギーそしてザールへ送られますが、ルールからモーゼル運河経由で運ばれるコークス炭を使って、この鉄石をロレーヌで溶解するのが最も有利なのです。このため一大鉄鋼工業地域が発達しました。

商品	アルザス ロレーヌ	フランス
鉄鉱	52.3	55.2
銹鉄	11.7	16.4
粗鋼	12.8	20.4
燐	1.8	1.8
塩	1.5	4.1
石炭	9.8	45.1
石油	0.07	2.7

(26) 地図からその主要な中心地の名をあげなさい。これら諸市に多くの現代式鉄鋼一貫工場があります。

この他この地域の工業に機械工業、化学工業、織物工業があります。例えば、メッツのシトロエン工場は、ギア箱その他エンジン部品を製造し、4,000人以上の労働者を雇います。織物工業は東フランスにおいて古く確立した工業です。主要な中心地は地図に示されていますが、動力は近くのボージュ山脈の水力発電所から得られます。織物業用の漂白剤はDomsble周辺の水床から得られる生産物の1つです。一部の塩は鉄山から採掘されますが、大部分は塩水として地下からポンプで吸い上げられます。ミュルーズ近くで切り出される塩もカリも両方が化学製品の製造に使用されます。

東フランスの一部の地方に富んだ農村があります。酪農と混合農業がロレーヌの石灰岩丘陵のあいだの粘土の谷間において重要です。専門化された作物がアルザスのライン地溝帯の肥沃な地方で栽培されます。(27) 下の説明入り見取図を使って、ライン地溝帯地方の土地

利用の註記をつくりなさい。

ストラスブールは、アルザスにとり主要な市場中心地で、一大河港そして工業市です。地元農業を土台にした生産物は小麦粉、葡萄酒および煙草です。その他の工業は機械、化学、織物および精油です。ストラスブールは、マルセイユとカールスルーエとを結ぶパイプラインの途中に位置します。

(28) ストラスブールが、Saverne やToul 谷経由でロレーヌやパリ盆地との、そしてライン河谷経由でドイツとの交易に良好な位置を占めていることを、略地図に描いて示しなさい。

南アキテーヌの海岸は非常にまっすぐで変化がありません。Biarritz からジロンド三角江まで、数列の砂丘を後にし、なだらかに傾斜する海浜が、何マイルもの幅で伸びています。卓越偏西風がはるか内陸に砂を運び、こうしてつくられた砂漠のような地域は「ランドゥ」とよばれます。肥沃な農業地帯一面に砂がこれ以上侵入するのを防止するため、広範囲のランドゥは稲科の草と松の木が植えられています。植物の根が、砂粒をたがいに結びつけ、そして植物の永久被覆の下に海岸砂丘をしいだいで安定しました。

松林は樹脂・タール・材木および木材パルプを生産し、数千の木材業者に仕事を与えます。「開発局」はランドゥ地帯にもっと農業を奨励することを目的にします。……「農作物、牛および森林のあいだの昔の比率を回復したい。森林の怪物のような発育は耕作されていた土地にも侵入してきて住民を追放し、そして過度の密生は絶えず火事の危険をつくり出しました。これが破壊されたバランスです。」※

ジロンド三角江はアキテーヌにおける河川排水のための主要な漏斗です。多い冬の降雨がつねに洪水の危険をもたらし、そして巨大量の泥・砂および砂利がガロンヌ川とDordogne川の低い流域のなかおよびエシュアリー平野のうえに排出されてきました。海から96キロ、ジロンド川の頭部に、大貿易港で地方首府のボルドーが位置します。ボルドーからの輸出品は主として木材、葡萄酒および煙草です。輸入は石油、植物性油と精製の甘蔗糖のような熱帯商品があります。ボルドーの古く確立した葡萄酒貿易は、地元の地域で生産された高品質のワインとブランデーに基礎を置いています。

盆地の段丘の肥沃な沖積土は、多数の葡萄園・果樹園および市場向け園芸場で、集約的に耕作されます。また小麦・大麦・玉蜀黍のような穀物がアキテーヌ一面に栽培され、そして東部の谷間では酪農が特徴です。肥えた土壌と湿った夏はまた煙草耕作に好適で、この作物は大きな国家管理のプランテーションで生産されます。農業生産を刺激するため「開発会社」が1958年に設置されました。その活動は、果実と野菜を商い、ボルドーやツールーズの市場に急送するため特殊装置の包装所の建設があります。

ツールーズはアキテーヌの、重要な交通路中心地でまた唯一の大工業都市です。その製粉・織物・飛行機・機械および化学の工場は、Ariège 河谷からの水力電気とラックおよびSt. Marcet のガス田からの天然ガスを使用します。これらのガス田はパイプラインでボルドーやナントと連絡し、さらにはるか離れてマルセイユ・リヨン・パリまで結びます。Parentis 油田からの石油はパイプラインで精製のためボルドーまで運ばれます。

アキテーヌ盆地は、ビスケー湾、ピレネー山脈および中央高地によって限られる三角形の平野です。そのなだらかに起伏する地表は主に、地質学上最近の砂・粘土および泥におおわれ、その上に肥えて耕しやすい土壌があります。気候はフランスで最も快適であり、温かい冬、暑い夏および全季節いくらかずつの雨が降ります。

千年以上の間住民はここで田舎の、そして農業の生活様式にしたがってきました。しかもこの地域は、炭田も鉄山もなかったので、産業革命からほとんど利益を受けませんでした。アキテーヌは、フランスの他の地域からむしろ離れており、その繁栄を2つの商品、葡萄酒と木材の職業にはなほだしく依存するようになりました。しかしながら、最近になって、石油がParentisで、また天然ガスがラックとSt. Marcet で発見されました。1955年にお役所ふうの「ボルドー・南西部開発局」がこの地域の農業・商業および工業上の資源の一層有効な使用を助長するため創設されました。特別な奨励が原料または動力源として石油や天然ガスを使う工業に与えられています。

「仮にアキテーヌが石炭および水力電気によってもたらされた2大産業革命から切り離されていたとすれば、今日、ボルドーあたりの全大西洋南西部海岸がラック=ガスのもつ好機を急いでつかむ準備中といわれるだろうに。事実、ガス田のなかに建設中の巨大な化学および電気冶金の複雑な装置がここ数年のうちにPauとボルドーとの線の上に顕著な工業活動を起こすらしい。」※

※ Jacques Chaban-Delmas. プログレス誌上

ローヌ・ソーヌ回廊は、2,000年以上の間、地中海の海岸地方と北西ヨーロッパとを連絡する、大きな自然的な通路でした。写真Aは、BC49年に北ガリアへの途次アビニョンの北へ1日行程の、Orangeにユリウス=カエサル命によって建立された凱旋門を示します。今このアーチを通してマルセイユからパリまでの幹線N7自動車道が走ります。活気のある運河と鉄道もまたこの回廊をたどっています。しかし今日ローヌ河谷はまったく違った理由で有名になっています。この川とその支流は、舟航を改良し水力と灌漑に水を提供するための、巨大な開発計画の一部として利用されつつあります。

5大プロジェクトはすでに完成しています(地図を見なさい)。Donzère-Mondragonにおける大水力計画もそれらに含まれています。(29)これを、地図と写真Bとを参考にし、説明しなさい。発電所からの電気の供給が新しい工業をひきつけています。1例がVienneより19キロ下流の巨大なRhône-Poulenc化学工場です。フランスのこの地方における生活様式が学習されねばならないのはこの変化の背景についてであります。

回廊の様子は場所によっていちじるしく変わります。北部ではソーヌ川の谷は幅広く平坦な谷床です。川はここでは幅が広く比較的静かで、重い川船に良い水路を提供します。多数の川船が、地図に示される運河を経由してパリ盆地に至る道中を、ソーヌ川をたどって航行します。またDoubs川およびベルフォール隘路を通るある運河経由でライン川に至る1つの水路があります。ソーヌ流域の気候は大陸的です。(ジジョン, 1月-1°C, 7月19°C, 年降水量625mm, 夏季に半分以上降雨)酪農が重要で、代表的農作物は小麦, 大麦, 甜菜およびクローバーです。この河谷の西端はBurgundyワインの生産によってとくに注目され石灰岩急崖の, Côte d'Orに画されます。風から遮蔽される位置, 日当りのよい状況そして肥沃な土壌をもち、入念に段々畑にされた丘陵側面の葡萄畑は、ヨーロッパで何か最も見事な葡萄酒を産出します。ジジョンは、ソーヌ流域の主要な市場町で、また非常に重要な交通路中心地ですし、食品加工・化学および冶金の諸工業があります。

リヨンの南部までローヌ河谷は狭く、ときには山峡のような区間によって連結される1系列の農業盆地から成ります。各盆地はその主要な市場町をもち、それらの多くは、バランスやアビニョンのような、古いローマの集落です。バランスの南は、気候がしだいに地中海性となり、夏の早天が灌漑を不可欠にします。耕地は、小さな市場向け園芸区画にたいいていは切り分けられ、集約的な農業が営まれ、葡萄・小麦・煙草・オリーブや各種果実そして花卉があります。糸杉の木の防風林は、冬および春の時期に強い勢いでローヌ河谷をときたま吹き降す、ひどく寒く乾いた風のミストラルから、家や作物をまもりまします。

リヨン(人口53万)は南東フランスの大部分にとって地域の首府です。ローマ人によって要塞都市として創設されましたが、中世商業の玄関として発達し、しかも16世紀にヨーロッパの主要絹製造の中心地になりました。それは主に、大きな交通路の焦点としてのその位置によって栄えて伸びました。(30)次の交通路のおのおのを記した矢印を略地図の中に示しなさい。— 至パリ 至ライン河谷 至地中海諸港 至スイス)今日リヨンの労働者の約半分が絹を製造します。その他の大きな工業は合成繊維, 冶金, 電気機械, 化学および食品加工です。

地中海のフランスはどちらかといえば複雑な地形をもちます。例えば、Garriguesのごつごつしたカルスト丘陵、ローヌ川の平坦なデルタ平野、リビエラの湾頭海浜、海岸アルプスの急坂の山麓のあいだに、何が共通しますか。答えは気候です。すなわち、これらの地方のすべてが穏かで湿った冬とほとんど日照り続きの暑く乾いた冬をもちます。(31) モンペリエとニースの気候グラフを描きなさい。(32) それぞれの地について(a) 最高および最低の月平均気温、(b) 年平均降雨量、(c) 最少雨および最多雨月をいいなさい。(32) モンペリエの比較的涼やかな冬について説明しなさい。(ヒント、蔭)

地中海の夏の火ぶくれを生ずる乾いた熱さが、フランスのこの地方に独特な土地景観と生活様式を与えてきましたので、この地域は特別な名、Midiを得ました。ミディは伝統的に、灌漑による小農民農業の、背の低い灌木植物の、太陽が大雨のようにふりそそぐ海浜の、またはげしい秋の風雨の地方です。今日ミディは、とくにLanguedocにおいて、急速でしかも影響するところの大きい変化の土地です。ここでは土地が、低く位置してラグーンに縁どられる海岸から中央高地の急坂の斜面まで、一続きの砂利でおおわれた段丘のうちに高まります。160キロメートルの美しい砂浜をもつ海岸は、自然保護のために隔離された6つの特別地帯(地図を見なさい)の中の1百万の観光客の要求に応ずるため、開発されつつあります。新しい自動車用高速道路や連絡道路は最近建設の別荘、ホテル、キャンプ場、ヨット基地まで容易に接近できるようにします。

数世紀間Languedocはその葡萄酒のゆえに有名でした。実にHéraultはその $\frac{2}{3}$ の地面を葡萄園で覆われ、そして全フランス葡萄酒の $\frac{2}{5}$ を生産します(大部分 vin ordinaire)。しかし多くの農園はあまりに小さくて効率が悪く、また多くの土地が夏の日照り続きから実際に被害をうけます。そのうえ、葡萄酒生産に過度に集中することは、土地をやせさせ、そして住民に単一の作物にあまりに依存させすぎます。

類似の変化が、アルルと地中海との間のローヌ川の2本の分流によってつくられた「島」のCamargueにおいて起っています。最近まで、塩湖の名残りのこの石の多い沼沢地区は、鳥の安息所およびプロバンス闘牛場で使われる野牛のすみかとして、よく知られていました。今日それはフランスで毎年消費される米の大部分を生産します。

ローヌ川の東の、プロバンスはLanguedocより山が多い。岩ばかりの、ぎざぎざを切り込む海岸が切り立ったような岬と美しい湾頭の浜をもっています。温和な気候および高速な現代交通の発達(i) 早春の野菜・果実および花卉の集約的耕作、(ii) 観光事業、の2つの基本的商業活動の成長を助けてきました。

これら2つの活動は重複します。というのは、優に1百万以上の行楽客が毎年リビエラを訪れ、しかも大行楽地カンヌ・ニース・モンテカルロやMentonがみずから価値のある市場です。野菜、果実および花卉はまたパリやロンドンまで送られます。観光事業は過去50年間にすばらしく大きくなりました。(34) 次の「頭と尾」を正しく結び、リビエラの発達を助けた事実の表をつくりなさい。

穏かな冬をもつ気候は 南に面する光景は 北のけわしい山脈は 現代式道路、鉄道、航空機のサービスは 砂質の湾、入江、山脈と蒼い海の結合は	}	?	最大限の日照を許します。 地域に容易に接近させます。 海岸を異常に美しくします。 一年中観光客をひきつけます。 寒い「ミストラル」から防ぎます。
---	---	---	--

Languedocとプロバンスの違った海岸線は、フランス地中海諸港の成長と重要性に影響を及ぼしてきました。沿岸漂流はローヌ三角州から西方へ泥と砂を運搬し、数世紀にわたってLanguedocの海岸の湿地とラグーンがしだいに泥でふさがれてしまいました。ローマ時代に重要だった数個の港は長い前から衰退におちてしまっています。Sèteだけが、漁船隊と精油所をもって、今いくらか重要です。ローヌ三角州の東は、泥でふさがれる危険から離れていまして、大商港で工業港のマルセイユと軍港のツーロンが位置します。

マルセイユ(人口965,000)はフランス第2の都市で、また最大の商港で全フランスの海上貿易の約 $\frac{1}{4}$ を取り扱います。BC600年頃ギリシア人により創られましたが、この港は19世紀中頃に本当に重要になりました。1869年スエズ運河の開通がマルセイユに東洋市場への容易な接近を与え、またフランスによる巨大なアフリカ帝国の獲得が繁昌する植民地貿易をもたらしました。新しい埠頭の拡張が最初北側に起こり、うしろに大きな防波堤が岸に平行して建設されました。1918年以来新しいドックや工業がÉtang de Berre海岸の周りに位置してき、最近そこに巨大な精油所が構築されました。(35) 正確にどこか、地図を見なさい) マルセイユは基本的には、ローヌ・ソーヌ回廊の南端におけるその指揮する位置のために発達しました。こうしてこの港はパリ盆地、リヨン工業地域およびスイスに奉仕します。マルセイユの大きな工業は、石油および植物油の精製、石油化学、造船、石鹼とマーガリン生産、および鋼鉄製造です。Fosの大きな粗鋼工場は、余分の雇用を与え、冶金工業を引きつけ、そして南ヨーロッパや北アフリカに鋼鉄輸出を発達させるために、建設されました。この「低い海岸地帯」鋼工場は、海によって運ばれてくる鉄鉱とコークス炭にまったく依存します。マルセイユは大きな旅客港であり、そしてその空港はフランスで第2の忙しさです。

アルモリカ Armorica はブルターニュおよびCotentin 半島の非常に適切な特徴の「海の土地」を意味するケルト語であります。多くの点でこの地域はこの国の残りから非常に違っています。地質的にそれは、部分的に古く固い岩石の尾根から成り(36) 何という褶曲山系の残部ですか)、荒れた花崗岩質高地と多くの肥沃な谷と人里離れた盆地がともにあります。数百万年の間、アルモリカの露出するが抵抗力のある岩石が大西洋の波に絶え間なくたたかれてきました。比較的固い岩石がけわしい断崖と岬とを形成し、その海側に数キロメートルの間危険な岩からできた浅瀬が走っています。(37) なぜか説明しなさい。

地質的に最近の年代における海面のほんのわずかの隆起が、間に入っている河谷を冠水して、海にりっぱなリアス式海岸をつくらせました。(38) アルモリカのリアスにある5つの港の名をあげなさい。

アルモリカの気候はまったく海洋的です。卓越する偏西風が年中低気圧と雨をはこびます。多くの日は全く曇り、そして観光客は細かい霧雨に包まれる風景を見て、しばしばひどく失望します。この不利さはむらのない気温によっていくぶん相殺されます。(39) プレストの気温のグラフをえがき、そして(a)年降水量と(b)気温の年較差を言いなさい。(40) プレストの気候をニースの気候と、解説付きで、比較対照しなさい。

温和で湿潤な気候は酪農に好適であり(41) なぜですか)、アルモリカは全フランスの乳牛の $\frac{1}{5}$ をもちます。全フランスの豚の $\frac{1}{5}$ がまたアルモリカに飼育されます。— (42) 理由を指摘しなさい。飼料作物(大部分燕麥と大麦)が人間の消費用のライ麦と蕎麦と同様に栽培されます。作物は海岸の緑色の砂岩土壤に急速に成長します。また市場向け園芸農業が非常に重要です。林檎が広く分布し、多くの林檎酒が製造されます。毎春、巨大な量の小さな果物や早期野菜(玉葱・馬鈴薯・花野菜など)が急行列車でパリへ、サンマローからイギリスへ送られます。ブルターニュの南岸や低ロアール河谷がとくに生産的です。農園はたいてい小さく、また畑は、花崗岩の台や地面から建てられる背の高い障壁によって、しばし

ば襲ってくる強風からまもられます。結果として生じた「チェス盤」風景がボカゴとよばれます。

数世紀間アルモリカの住民は生計の補助源として海に向ってきました。Lorientはフランス第2の漁港です。かなり大きな漁船隊をもつ他の港湾が地図上に掲げられています。(43)それらの名をあげなさい) 捕獲される魚は鯖・鱈の類・鮪や鰯で、小海老・貝・伊勢蝦や牡蠣も同様です。いくらか大型船がノバスコシア沖のグランド＝バンクの鱈漁場をおとずれます。アルモリカの内部の多くは不毛で、人口が稀薄であり、レンヌを除く全部の大きい町は海岸にかまたは近くに立地します。それらのうち比較的重要なものの詳細は地図に示してあります。

レンヌ(人口195,000)はブルターニュの首府で重要な市場町です。それはアルモリカのなかで最大で最も肥沃な盆地の中心で大きくなりました。多くの道路と鉄道の路線の自然的焦点のため、それは北西フランスの大部分にとって商業およびサービスの中心地として作用します。加えてそれは有名な大学と発展傾向の工業をもっています。

高地フランス

1 中央高地はフランスの高い土地のうち最も広い地域であり、この国の1/6をおおいます。その自然地理は地図と図表に表示されています。(44)これらを研究して次の文章を正しく完成しなさい。

この高原は、石炭紀岩石の(壊れた、完全な)尾根により囲まれる($g^{(註3)}$)のような古く硬い結晶性岩石からなる。後者は主に(石灰岩、花崗岩)である。しかしいくつかの、例えばLe(C), St.(E), および(A)の挾炭岩石を含む。ある場所、とくに(A)において、溶岩その他(火山、堆積)岩がより古い層の断層を通して地表まで無理にその道をつくった。高原の大部分は1,000メートルと2,000メートルの間に横わり、しかもその表面は大部分(深くへこみをつくる、なだらかに起伏する)。全体の「かたまり」はアルプスをつくった造山運動によって(東南、北西)へ向けて下傾させられた。このとき、より高い土地の(多く、すべて)がCevennes山脈に位置し、そしてそれは(f s)によってLangueds平野までめざましく落ちこんでいる。多くの河川がとくに(C)山脈の石灰岩地方において、深く刻まれた峡谷によりこの高原の末端を横切る。ロアール川とその支流(A)川が小さな地溝帯の中に深く侵入する。

中央高原における土地利用 この高原は3つの違った気候の間に位置する((45)それらの名称をあげなさい)ので、その気候は場所によって大いに変化します。夏、北西部地方は北西ヨーロッパの特徴を表わす暖かく湿潤な環境をもちます。これに反し、南部と南東部はより典型的に「地中海型」です。しかしながら、冬は、比較的深い谷を除き、どこもすべて寒く、降雪が多い。降水量は比較的高い土地では2,000ミリを越えます。

比較的高海拔の高原および尾根は、家畜農業、すなわち、中央および北部の湿気のある高原上の肉牛および乳牛、南部における羊と山羊に大部分捧げられます。雌羊の乳からつくられるRoquefortチーズは後者の地方からの有名な産物です。

耕作農業は緯度、土壌そして気候によって変化します。北西部の高くむき出しの台地上には、わずかなライ麦・蕎麦や馬鈴薯が重要ですが、しかし肥沃で遮蔽される谷は小麦が栽培されます。ロアールおよびAllier河谷の豊かな火山土が主な農業地域です。もっと暑い南部では、多くの土地は階段耕作され、そして玉蜀黍・葡萄・桑やオリーブが殖えられます。

長年の間、年若い人たちが、もっとよい給料を払ってくれる仕事をどこかほかで求めるために、この高原を離れました。この人口減に対策するためAuvergneおよびLimousinの新地域計画が、農業と林業を改良し、観光事業その他産業を助長することを目的にします。目立った開発事業は、この地域の家畜の品質向上をはかるための羊と牛の種付所、Allier河谷の灌漑飼料作物の栽培、排

水およびより良い品種の播種による高地牧場の格上げ、以前に不生産的だった丘陵地方5,000ヘクタールの植林です。いくつかの水力発電湖が、キャンプやキャラバン用の休暇村や別荘をもって、観光中心地として発達しつつあります。

この高原の石炭盆地は、小さいけれども、数個所の工業地方を起こしています。これらのうち最も重要なものがサンテチェヌヌ周辺に位置しています。この炭層は、断層により多く破壊されてますが、しかし、主要なフランダース炭田が1914-18年戦争中侵略されて以来、強力に開発されてきました。年産350万トンの石炭の約 $\frac{1}{4}$ がリヨン工業地方へ送られます。残りがサンテチェヌヌとその周辺の工場で大部分が使用されます。コークスが地元の鉄鋼工場用に生産され、そして、これらの工場はローヌからの銑鉄を使い、兵器・自動車・飛行機その他専門機械工業用となる高品質の鋼鉄を生産します。またサンテチェヌヌ地方に化学、絹および化繊織物、ガラスおよび陶器の工場があります。加えてサンテチェヌヌは高原の全東端部の市場中心地です。

ルクルゾーは、もう1つの主要炭田町で、多種の機械工業をもち、その最も目立つものは兵器と機関車です。Alès炭田は年約3百万トンの石炭を生産します。この工業は高級鋼製造、化学および絹製造です。

クレルモンフェランはこの高原で第2の大都市で、繁栄するAllier川谷の主要な商業および市場中心地です。19世紀の間にそれは非常に重要なゴムタイヤ製造都市になりました。今日巨大なMichelinおよびBervougnonゴム工場があります。その他の工業は機械化学、履物および食品加工（とくにジャムとチョコレート）です。

中央高原の工業都市のための動力は、炭田においておこされる火力電気だけでなく、またLot, Tarn, VézèreおよびDordogneの諸川の谷の、無数の水力発電所から入手されます。これらの発電所はフランスにおいて生産されている全水力の約 $\frac{1}{4}$ とみなされます。

辺鄙な地方の中央高原はフランス生活の主流からどこか切り離されたところでした。そして、この孤立は近年観光業の成長によってある程度打破されました。主要な観光上の呼び物は、Lepuy附近の火山首、Tarn川上流の大きな石灰岩峡谷、および内陸の温泉行楽地であるピシーの温かい鉱泉です。

(46) 上記の情報を使って、「中央高原の農業、工業および主要都市」の標題をつけた、記号による説明のある大きな地図を描きなさい。

2 フランス=アルプスは冒頭に記述された大アルプス褶曲山脈の一部を形成します。氷河のある山岳地がすべてそうであるように、最も高く最も険しい区域は人が住めない((47)なぜか)し、やっとの人口も比較的低い斜面や河谷にたいてい制約されます。

(48) 何という2つの河川とその支流が全部のフランス=アルプスを実際に排水しますか。

フランスにおける水力電気の約 $\frac{2}{3}$ および全発電量の $\frac{1}{3}$ が、ローヌ河谷を含む、アルプス地方で生産されます。新しい計画がいつも実施されており、とくに上Isèreの流域においてそうです。(50) どれだけの数の発電所がそこに位置していますか。アルプス最大の発電所がMalgovertにあり、1954年に開設され、5億2千万キロワット時の年発電量があります。これらの発電所で生産された動力の大部分がアルプス諸谷の工業によって使用されます。しかしいくらかがフランスじゅうの配電の「格子」に供給されます。伸びるアルプス工業地域は、首府グルノーブルに中心をもちます。たいてい電気化学または電気冶金と関係

する工場の長い列が、Isère・Arly・Romancheおよび中Duranceのような河谷に沿って伸びています。いくつかの伝統的工業（例、織物・手袋と時計製造）が現代化されましたが、大きな工場が合金鋼・アルミニウム・カーバイト・火薬および肥料のような商品を生産します。

フランス＝アルプスにおける農業	
<p>家畜飼料がフランス＝アルプス一帯の主要な農業の仕事です。しかし農業の類型は高度によって変化します。主な対比は次に要約されています。(49)フランス＝アルプスの地図の大きな写しをつくり、その適切な場所に註記を加えなさい。</p>	
<p>フランス＝アルプス北部</p> <p>「大陸性」気候、いくらかの万年雪、氷河および松類の森林をもつ。</p> <p>乳牛 緑のアルプス牧場において、山の谷の移牧をとまなう。</p> <p>耕地農業 諸谷において小麦、乾草、馬鈴薯、葡萄および落葉性の果樹（例、林檎）</p>	<p>フランス＝アルプス南部</p> <p>「地中海式気候」気候、乾いたカルスト景観をもつ。</p> <p>羊 羊毛、皮革、乳およびチーズ用。</p> <p>耕地農業 灌漑される段々畑の斜面においてのみ葡萄、小麦、玉蜀黍、煙草および亜熱帯果樹（例、杏子）</p>
その他のフランス高地地方	
<p>ピレネー山脈は、南アキテーヌの平野から峻しくそびえ立ち、ビスケー湾から地中海まで、ひどく氷河作用を受ける褶曲山脈のほぼ連続する障害を呈しています。アルプス程高くありませんが、とくに中央部で横断することが困難です。そこでは冬の降雪が多くしかもすべての峠が2,000メートル以上に位置します。(51)君の地図帳からフランスとスペインとを連絡する鉄道路線がたどる道を述べなさい。石灰岩が支配的な岩石で、ためにカルスト景観がとくに東ピレネーで普遍的で。(52)なぜそこに)</p> <p>高地において家畜農業、たいていは羊と山羊が主要な収入源です。牛が北西部で飼育されます。そこはより湿潤で(53)なぜ)、それにより繁茂した牧場をもちます。谷において、耕地農業は玉石粘土や沖積土の上で可能です。小麦、玉蜀黍、野菜、乾草および葡萄が主要作物です。</p> <p>ここでは多くの現代式水力発電所が建設され、それらは水力電気の全フランス生産高の約$\frac{1}{6}$を生産します。安い電気はピレネー谷まで電気化学や電気冶金工業をひきつけました。(54)前掲の地図から主要工業中心地の名をあげなさい。</p>	<p>ジュラ山脈は1,700メートル以上に達する個所がある一続きの石灰岩高原および褶曲山脈です。雨が多くそのため森林におおわれそして広い高地牧場があります。</p> <p>牛の飼育が生計の主要な源で、家畜は5月から9月までの間放牧のため高地の牧場に行かされ、冬に遮蔽された谷の農場につれ戻されます。この地域は酪農品とくにGruyèreチーズが有名です。また木彫りや柱時計や玩具製造のような伝統的な「山の」仕事があります。</p>

概要 フランスに関する顕著な事実は、その非常に多彩な地理にかかわらず、この国が政治的に統一されていることです。フランスが民族国家として出現して以来権力がパリに集中しており、そしていろいろの県や市の評議会はイギリス王国の同じ団体とくらべて、日々の出来事にたいする管理権がはるかに少ないのです。この中央集権の重大な結果が、すでに注意した、交通の放射状の型に見られます。(55)どの程度までフランスの鉄道のパターン(地図を見なさい)が地形の影響をうけていますか。(56)この国の地形が中央集権政策にとっていかに(a)好適であり、(b)障害であると考えますか。

フランスの諸地域における多様で互いに補足し合う自然はフランスに、イギリスやイタリ

アのような他の経済先進国よりも少ししか外国貿易に依存させません。フランス工業は使用原料のうち大きな比率を輸入品に頼りますが、この国は小麦および主要食料が自給的です。他国から運ばれる主要商品は、食料(19%)、燃料・石油等(17%)、機械・輸送機械(14%)、金属・金属製品(11%)、織物・織物原料(9%)、化学製品(5%)、その他(25%)です。主要輸出品は、機械・輸送機械(33%)、金属・金属鉱(17%)、食料(13%)、化学製品(9%)、織物(7.5%)、その他(20.5%)です。(57)この貿易型を説明する棒グラフを描きなさい。

フランス農業および工業地域と主要鉄道路線図

この地図はフランスの主要な農業地域を示します。(58)この地図と本書前掲の地形図ときみの地図帳の降雨図との間に、きみはどんな広範囲にわたる連結を見ることができますか、記述して説明しなさい。(59)地図中のA、B、C地において栽培を見出すことを期待するであろう農作物の主なものを、理由をつけて挙げなさい。(60)地図中のEとF地における牧畜はどう違いますか。(61)市場向け園芸農業と果実栽培地域の分布を説明しなさい。

フランスの5,100万の住民の約半分が小さな市場町と村に住み、農業から生計をうけています。フランスじゅうを旅行するイギリス人は、イギリスでは圧倒的に普遍である、はびこる工業的集合都市が少数で間遠である、という景観が今も優勢である平和な田園の風景に印象づけられます。

フランスの主要工業地域は1-7の番号がつけられています。それぞれを次の名称から選びなさい。ールアン、東部、リヨン・サンテチェンヌ、Nord(北東炭田)、アルプス、マルセイユ、パリ。工業地域から離れる重要都市は頭文字で地図に示されています。(62)それらのおのおのを確認し、その主要な工業活動の名をあげなさい。(63)主要工業地域について動力が主に(a)水力電気、(b)地元または近傍の炭田、(c)輸入石油のうちどれから得られますか。

このイギリスのヨーロッパ地理の教科書は、全本文263頁のうち26頁をフランスの叙述に割いている。ちなみに、その採る地域区分と配列が、(1)全体としてのヨーロッパ、(2)北ヨーロッパ、ノルウェー・スウェーデン・フィンランド・デンマークおよびアイスランド、(3)フランス、(4)西ドイツ、(5)低地諸国およびルクセンブルク、(6)アルプス地方、スイスおよびオーストリア、(7)南ヨーロッパ、(i)イタリア、(8)南ヨーロッパ、(ii)スペイン・ポルトガルおよびギリシア、(9)ソビエト社会主義共和国連邦(USSR)、(10)東ヨーロッパ、であるから、フランスだけ精しく記述しているわけではない。ともあれ内容の程度は、わが国のものと比較して、段違いに詳細である。ただし、両者の前提条件が全く相違することをここに指摘しておく。すなわち、日本は世界地誌を悉皆学習しようとするが、イギリスは日本流にいうと3~4単位のヨーロッパ地理を選択するのである。

比較といえ、イギリスの教科書は、われわれからみて、著述、編集そして教授法に顕著な特徴が感じられるが、ここでは触れないことにする。

この文章が、やがて高校から消えていく地誌教育の挽歌ではなく、いつか復活するときの布石の1個になってほしい。

(註1) 筆者のロンドンMayfield Schoolにおける見聞による。紹介したLowryのEurope and the Soviet Unionは1972年当時同校4学年が使用していた。

『現代地理教育講座 第2巻』所収、浅倉隆太郎「イギリスの地理教育」45-52頁

菅野芳彦・小菅東洋訳、バージェス著「イギリスの学校」明治図書 昭和48年

(註2) ()中に最も適当地名頭文字を示す。以下()中の大文字は同様。

(註3) ()中に記入すべき語句の頭文字を示す。以下も同様。